

1.『^{ぶもおんじゅうきょう}父母恩重經』を読む

会員 矢吹壽年

1. 仏教伝来と小乗・大乘、

中国伝来と愕くべき記録術

釈迦の説教のほとんどが、生れて80歳で亡去（これを寂滅涅槃＝じゃくめつねはんという）するまでの中、19歳で、王宮と家族を捨て、多くのバラモンを訪ねて、彼らが吹聴（ふいちよう）する最勝（さいしょう）の法を、自得（じとく）したいと12年の間（7年との説もある）、修行を積んだけど納得がいく真の法でないと悟り、苦行をすてて尼連禪河（にれんぜんが）に入り、沐浴して牧女（もくじょ）の捧げる牛乳を飲み、心身さわやかとなった。

次に仏陀伽耶（ぶつだかや）の菩提樹下（ぼだいじゅげ）の金剛法座に座し、沈思黙想（ちんしもくそう）、よく思考の邪魔をしようとする魔を降（くだ）して、大悟（だいご）を開いたのであった。

悟りを開いた釈尊は正覚を成（じょう）じたその場で華嚴經を説くが、民衆は理解できない。次いで波羅奈国（はらないこく）、鹿野苑（ろくやおん）へ行行って僑陳如（きょうじんによ）等の5人を済度（さいど）した。以後50年間80歳で拘戸那（くしな）城外の沙羅林（さりりん）で寂滅（じゃくめつ）するまで、宝輪を転じ。（説法を説き続けること）不安な民衆を教えた。

王舎城（おうしゃじょう）に於いては、頻婆沙羅（ひんばさら）王をはじめ、宮廷の人々を教化し、故郷では父王を始め、親類縁者をも化導（けどう）した。釈尊の従弟・阿難（あなん）や息子の羅護羅（らごら）も帰依し、舎衛城（しゃえいじょう）の富豪・須達（すだつ）長者は有名な祇園精舎を供養した。

勿論釈尊に敵対する者も現れた。九横（くおう）の大難と呼ばれる中で、阿難（あなん）の兄、提婆達多（だいばたつた）が驕慢（きょうまん）の

心を起こし、マカダ国の阿闍世太子（あじゃせたいし）と結託して釈尊を迫害しようとする事件なども起こるが、釈尊はこれらの大難を少しも恐れず、阿含（あごん）、方等（ほうどう）般若の諸經を説いて、最後に出世の本懐たる法華經を説いたのである。日蓮も開教、布教に当たって度々の法難に、釈迦の苦勞を偲び耐えた。釈尊入滅、等の時期については諸説あるが、東洋古来の記録に周、昭王24年4月8日の生まれ（前 1029）誕生、同穆王（ぼくおう）53年2月15日（前 949）入滅と記録し、「周書異記」（しゅうしよいき）に載せてあるという。天台、伝教の両大師もこれを請けている。

こうして成立した仏教であるが、釈迦の死後、どのような体制で教線の伸長、戒律の護律、時代の変動に添って体制を運営していくかについて数多くの協議がなされ、その中から、釈尊の本当に広めたかった教義は何か、法華經を説く前に伝えた無量義經（むりょうぎきょう）に 40 余年、未顕真実（みけんしんじつ）と説いて法華經こそ釈尊の本懐とし、天台・日蓮の宗派が支持する。

この恩重經は釈迦の初期の説法で、小乗仏教に属する内容と思われるが、伝来が唐代で大乘仏教として伝来していることになる。

2. ^{ふほうぞう}付法蔵の二十四人

教えを伝えるための方法

釈尊生存中、直接釈尊に直に付嘱（ふしよく）されて、広宣（こうせん）付嘱、伝持（でんじ）付嘱を請けたといわれる付法蔵（ふほうぞう）の 24 人が次々に生れて、仏法を伝持、弘通（くつう）して弘めたが、これらの付法蔵の導師たちはその時代相応の教法を弘めたのである。

魔訶迦葉（まかかしよう）らが釈尊から付嘱を請け、付法蔵第5の提多加（だいたか）までの百年間は、ただ小乗教だけを弘通した。

次の弥遮迦（みしゃか）より付法蔵第十の富那奢

(ふなしゃ)まで正法の前の五百年・解脱堅固(げだつけんご)の時代大集経(だいしつきょう)に説く五個の五百歳の最初の五百歳。仏道修行をする者が盛んに解脱し悟りを開くことが出来る時代)に小乗教を主にごくわずかの大乘仏経を弘通した。

正法の後の六百年から一千年までの五百年は禪定堅固(ぜんじょうけんご)の時代、馬鳴菩薩(めみょうぼさつ)から第二十三の師子までの十余人の人、であり皆はじめはヒンズー、バラモンなどの外道に入り、次に小乗経を極め、後には諸大乘を極めて大乘を弘めて諸小乗をさんざんに破した。

大乘は小乗を論破し辱めても、佛罰が当たらないのが、仏法の進歩につながる法則・哲学としてうまれた。何が正義かを追求する法論の法則である。

こうして紀元3～4世紀ごろ大乘仏教が哲学として成立したものが中国へ、シルクロードを通して伝来したのであらうと推察する。

3. 父母恩重経・現代に通ずる一般社会環境と、人類の民度・伝来環境

この経は、近年(1900)窟(いわや)を住处として暮らしていた道鏡の道士によって発見された、敦煌の莫高窟の千仏洞で他の古文書と一緒に発見された経です。敦煌のタイムカプセルで発見されたこの経は、以後、中国人の手が入らなかったことを示唆する。

インド哲学になじまない、父母と子供達の心境や、あまりにも現代にも共通する事項を示しており、儒教との習合を示していることから、偽経とされることもあった。しかし、いかに釈迦の哲学が偉大であるとは云え、仏教が中国に素のまま導入されたとは言えない。

むしろ仏教は中国に至る各地の国都や宿場を経由するうち、本筋を違えない範囲で中国に馴染むように少しずつ内容が改められ、翻訳され、伝播されたから、異教と阻害されることなく儒教の一派として受容されていったのである。

これに携わった者は儒教の研修者達であって、中国以外の古代インドの進んだ文明、教育方法、医学、薬学、化学、経済学、武道、音楽、舞踊、絵画、彫刻、彫塑、特に仏教教育の指導者の育成、経の整備、仏教弘宣を経済的に援助する財団や指導者教育機構まで、中国にそれまで無かった文化がこぞって導入されたのである。道教が成立するのに影響があった。

彼らは仏教に関するインド文明、文化も研究し勉強しようとしたから儒教の中でも共通点が増すようになる。だから、西遊記の内容に儒教の用語が多く、儒教の仙人や天神が出演するのはこれによる。

儒教・道教も大方成立していたが、未熟であったから仏教と並べて三教として、尊んだ時代があった。それぞれが成立すると、他教はお互いに争い、廃仏の事件も起こった。日本の神道や修験もこの延長にある。

「以下のように私は聞きました。あるとき、佛(ほとけ)、王舎城(おうしゃじょう)の耆闍崛山(ぎしゃくつせん)中に菩薩(ぼさつ)、声聞(しょうもん)の衆と俱(とも)にましましければ、比丘(びく)・、比丘尼(びくに)・優婆塞(うなそく)・優婆夷(うばい)、一切諸天(いっさいしよてん)の人民(にんみん)、および龍神鬼神等(りゅうじんきじんとう)、法を聞かんとして来たり集まり、一心に宝座を囲(かこん)で瞬(まばた)きもせず尊顔を仰ぎ見ました。」

この時、佛、すなわち法を説いて云われるのには。この世の中のすべての善男子、善女人よ、父となる男性には恵み慈しみの恩がある。母となる女性には慈悲の恩があるのだ。何故かと云うと、人としてこの世に生まれるのは、宿業を因とし、父母を縁としているのだ。父でなければ生まれず、母でなければ育たず。この男女の縁によって気を父の胤(たね)に受け、形を母の胎(はら)に託す。この因縁によって非母が子を思うこと世間に比(たぐ)いなく、その恩

は喩(たと)えようがない。

はじめ、胎をうけてより十月を経る間、行・住・坐・臥、ともに数多の苦悩を受ける。苦悩止む時がないから、好きな食べ物も食わず、美しい着物も買わず、着ず、愛欲の心も起さず、ただ一心に五体健全と安産を思う。

月が満ちて産む刻になれば、業風(ごうふう)吹いて産を促し骨節ことごとく痛み、汗膏(あせあぶら)ともに流れて苦しみ堪えがたし。父も心身、おののき恐れて、母と子を心配し諸親眷属皆(しいしんけんぞくみな)、ことごとく苦悩す。

すでに生まれて草上に落ちれば、父母の喜び限り無いこと、なお貧女(ひんにょ)が如意珠(にょいしゅ)を得たようだ。

父、母も初めてこの世に生れ出でたるが如し。「子がうまれたとき父母も生まれる、育たねばならぬ子も父母も」金光碧水＝先代金光教主の和歌がある。同様の歌意であろうと紹介した。

それから、母の懷を寢床とし、母の膝を遊び場とす。母の乳を食物とし、母の愛情を命とす。腹が減った時、食を求めるとき、母でないとたべない。喉が渴いて求めても、母でなければ飲まず。寒き時、着物を加えるに、母にあらざれば着ず。暑き時着物を取るに、母でなければ脱がず。母は、飢えていても、口に含んだものでもこれを食べさせ、母寒さに苦しむ時も、着ているものを脱いで子に着せる。母でなければ養われず、母にあらざれば育たず。

その子、乳母車を離れるようになれば、子の十本の爪の不浄でも口に作る。乳を飲むことは百八十斛(こく)ともいわれる。父母の恩が重いことは天の高さの果てしないことに喩(たと)えられるだろう。

母、家に帰る時、未だ至らざるに、今や我が兄、我が家に啼き嘆きて、吾を恋い慕わんと思い起こせば、胸騒ぎ心驚き、両の乳、流れ出でて忍びに耐えることができない。いそいで家に帰る。兄、遙かに母の来るのを見て、乳母車に在ればすなわち頭を

揺るがして甘え、外に在ればすなわち腹這いして出でてきて、空泣きして母に向かう。母は子のために足を速め身を曲げ長く両手をのべて塵土を払い、我が口を子の口に付けつつ、他人のまえでもははばかりず、乳を出してこれを飲ませる。兄は母を見て喜ぶ。両情一致恩愛、皆同じであろう。そしてこれに過ぎる愛情はない。

二歳、懷を離れて始めて行く。父でなければ火が熱く、火傷(やけど)すること知らず。母でなければ刃物が指を落とすことを知らず。

三歳、乳を離れ初めて食らう。父でなければ毒が命を落とすこと知らず。母でなければ薬が病を救うこと知らず。父、母、そとに出でて他の宴席に行き行き、美味珍膳を得ることあれば、自らこれを食らうに忍びず、懷に収めて持ち帰り、子を呼んで与える。十たび帰れば九たびまで得て来る。得れば常に歓喜してかつ笑いかつ食らう。もし一度も土産がないことがあると、偽って泣き、偽り嘆いて父に、母にせまる。

やや成長して朋友と交わりて遊ぶようになると、父は絹を求め帯を求め、母は髪をくしけずり髻(まげ)を結び、己の好みの衣服は皆、子に与えて着させ、自分は古い着物、敗れた着物をまとう。

4. 無意識に犯す仏教信仰上の大罪

やや成長して朋友と交わるようになれば、父は絹を求め、母は髪を梳(くしけ)ずり、髻を結び、己の好みの衣服をみな子に与え、寸法を直して着させ、じぶんは古着で済ませる。

成長して他の娘を娶れば、父母は疎遠となり夫婦は特に親しみ、近づきあい部屋の中で妻と共に語り楽しむ。

父母。歳を得て氣老い力衰えれば、頼りたいのはただ子のみ。頼りにしたいのはただ嫁のみ。なのに夫婦とも朝から晩まで問うて答えることもない。

或いは父は母を先立てて、母は父を先たてて、一

人空房を守っているのは、一人旅で宿に泊まるように、恩愛の情もなく、談笑の楽しみもない。夜半の布団は冷たく五体も休まらず、蚤、虱多く暁に至るまで眠れないことも、幾たび、寝返りをうちながら、独り言に、ああ何の宿罪があつてこのような不幸な子供を持ったのかと。

用を感じて子と呼ばば、眼を怒り罵る。嫁も子もこれを見て共に罵り、共に辱しめめば、父母、首を垂れて笑み、我慢する。嫁も児もまた同罪。夫婦和合して親子で五逆の大罪を造っているのを知らないのだ。(釈尊はこれを地獄に墜ちる大罪と説いた)

或いは、また、急に話したいことがあつて急いで呼び寄せようとすれば、十度読んで九度は多忙を理由に応じない。さらに呼べば、かえって怒り罵って老いぼれて長生きするより早く死ねという言葉が返る。父母、これを聞いて怨念胸にふさがり、涙、臉について眼も眩(くら)み心惑い、悲しみ叫んで云う。ああ、お前が幼少の時、私達でなければここまで養い育てられなかったろう。しかし、現在にいたつてこのような次第だ。ああ、私がお前を生んだのはどうしたことだろう。

もし子がいて、父母にこのような言葉を言わせるならば、子も孫もその行いと言葉によって罪を得、死後に地獄、餓鬼、畜生の中に墮ちる。一切の如来、金剛天、五通仙の諸天善神(しよてんぜんじん)もこれを救い助け、護ることができないのだ。父母の恩、重いことは天の極まりないようなものだ。

善男子、善女人よ。これを別して喩えれば父母に十種の恩徳がある。それは、

- 一には、懐胎守護(かいたいしゅご)の恩。
- 二には、臨産受苦(りんさんじゅく)の恩。
- 三には、生子亡憂(しょうしぼうゆう)の恩。
- 四には、乳哺養育(にゅうほよういく)の恩。
- 五には、廻乾就湿(えかんしゅうしつ)の恩。
- 六には、洗濯不淨(せんかんふじょう)の恩。
- 七には、嚙苦吐甘(えんくとかん)の恩。

八には、為造悪業(いぞうあくごう)の恩。

九には、遠行憶念(おんぎょうおくねん)の恩。

十には、究竟憐愍(くきょうれんみん)の恩。

父母の恩の、天の高く極まりない如く。善男子、善女人よ、このような恩徳にどのようにして報いるべきだろうか。佛は偈文(げぶん)を以って示された。

非母、子を孕めば十月の間に血を分け肉を分かちて、身、重病を感じず。この子供の身体、これによって成就す。月満ちて時至れば、業風催促(ごうふうさいそく)して、偏身疼痛(へんしんとうつう)し骨節解体する如く、心神悩乱し、忽然として身を亡ぼすかと思う。

もし、それが平安であれば、なお蘇生してきたように、子の声を発するを聞けば、母も自分が生まれ出でたように喜ぶ。そして初めて産んだときには、母の顔は花のようだったのに、子を数年も養えば、容貌も憔悴するのだ。

水のように冷たい霜の夜、氷のような雪の暁には乾いた布団を子に与え、子の寝小便に湿る布団に自分は寝むる。小、母の懷に糞をし、或いは衣服に尿するも、自ら洗い、濯ぎして臭穢も厭わなかったではないか。食味を口に含んで子に与えるときに、苦いものは自ら飲み、甘いものは吐いて子に与える。

もし、児の要求に、やむを得ないときには、佛の道、人の道に外れることも厭わない。(子が空腹で泣くため売店で万引きをした母親の話) もし、子遠くへ行けば、帰えってきて、顔を見るまでは、戸口を出入りしてこれを思い、寝ても覚めてもこれを思う。

自分の生あるうちは、子に代わらんことを思い、自分が死んだ後も子の身を守ることを願う。このような恩徳、どのように報いればよいのか。

しかし長じて成人となれば、声を荒げ気を怒らして、父の言葉に従わず、母への言葉に瞋(いか)りをふくむ。そして妻を娶らば、父母に背き違ふこと、恩しらずに同じ、兄弟を、憎しみ嫌うこと、恨みある者のよ

うである。妻の身内来れば家に入れて饗応し部屋に入れて歓談す。ああ、皆の衆、意識が傾倒していないか。親しいものを疎み、疎い者をば却って親しむ。父母の恩の重いことは、天の高さの極まりないのと同じではないか。

この時、阿難(あなん)という釈迦の十大弟子の一人が座を立てて右肩をあらわに長跪(ちょうき=ひざまづき)合掌して佛に聞いて云うのに。「世尊よ、このように尊い、父母の重恩に、我ら出家の子は如何にして報ずれば良いか、委しく示して下さい」佛のいわれるのには、「よく聞きなさい、孝養の一事は、在家、出家の別はありません。外出した時、美味しい果物を手に入れたときには持ち帰って父母に献上しなさい。父母、これを得て歓喜し、みずから食べないで、まずこれを仏前に供えれば、菩提の心をあらわすことになる。父母、病であれば床のそばをを離れず、親しく看護しなさい。一切の事、これを他人に委ねることのないように時を計り、便を伺い、懇ろに粥飯(きゅうはん)をすすめなさい、親は子の勧めるのを見て粥を喫し、子は親の食するを見て、食べたくれたことに己が意を強くするでしょう。親しばらく睡眠したなら、気を静めて息を聞き、眠り覚めれば、医に問うて薬を進めなさい。日夜に三宝(仏・法・僧)に恭敬して、親の疾(やまい)癒(い)えんことを願いなさい。常に報恩の心を抱いて、片時も忘れることのないようになさい」

このとき阿難(あなん)、又問うていわく。

「世尊よ、出家の子たち、これだけで、父母の恩に報ずることになるのでしょうか」佛が云われるのには いや、未だ父母の恩に報ずることには、はならないこともある。親、かたくなにして、三法を奉ぜず、人として思いやりの心を持ってない者の行い、不義で人の物を盗むような者、無礼で色にすさみ、不信で人を欺き、不智で大酒を飲むような親の子はまさに極諫(きよくかん)してもこれを理解できるように諭しなさい。もしも、なお暗

くして、まだ悟れなければ、理解のための譬(たと)えを引いて因果の道理を述べ説いて、未来の苦患を救いなさい。なお頑なに改めることができないときは、大声で泣いて断食をしなさい。親、頑(かたく)ななりといえども、子の死なんことを懼れるだろうから、恩愛の情に引かれて強いて忍びの道に向かうであろう。もし親、志を変えて佛の五戒を奉じ、仁あって殺さず、義あって盗まず、礼あって淫せず、信あって欺かず、智あって酔わなければ、やがて家門の内は親に慈に、子は孝に、夫は正に、妻は貞に、親族和睦し、婢僕は忠順に、六畜虫魚に至るまで、普(あまね)く恩沢を被って、十方の諸仏、天竜鬼神。有道の君、忠良の臣より庶民万姓に至るまで敬愛せざるはなく、暴悪の主、佞嬖(ねいへい)の輩、狂児妖婦(きょうじようふ)、千邪万怪たちも、これをどうしようもないだろう。こうして父母、現世に安穩に住し、後世には善処に生じ、佛を見、法を聞いて、長く苦輪を脱することができるだろう。このようにして、初めて父母の恩に報ずることができるのである」

佛さらにこの説を重ねて言われるのには、皆さんよく聞きなさい。父母のために心力を尽くして、あらゆる佳味・美音・妙衣・車駕・宮室などを供養し、父母に一生遊楽に飽くぐらい尽くしても、もし未だ三宝を信じさせなければ、なおこれを不幸と云うのです。どうしてかというと、仁心があって施しを行い。礼式あって見を正し、柔和にして恥を忍び、勉強して徳に進み、意を寂靜に潜め、志を学問に励ます者といえ共、油断してひとたび酒色の溺れれば、悪魔はたちまち隙を伺い、妖魅すなわち便りを得て、財を惜しまず、情を蕩(とろ)かし、怒りを発し、怠りを増し、心を乱し、智を晦(くら)まして、鳥獸に等しい行いをさせるからです。世の中の皆さん、昔から現在に至るまで、これによって身を亡ぼし、家を亡ぼし、君を危うし、親を辱しめたる者は多いのです。ですから、沙門は独身で妻帯せず、その志を清潔にして、ただ一筋に佛道を糾明し大衆を導くのです。

子たるものは深く思い、遠く慮って、そして孝養の軽重と行う時期とを知るようにしましょう。これが父母の恩に報ずることなのです。

阿難は涙を払いながら、座から立って長跪合掌して進み、佛に申して言われるには、

「世尊よ、この経は何と名付くべきですかまた、どのように奉持すべきでしょうか」と。

佛、阿難に告げられるに

「阿難よ、この経は父母恩重経（ぶもおんじゅうきょう）と名付けます。もし衆生（しゅじやう）のみんなが一度もこの経を読誦（よき）したならば、すなわち父母の乳哺（にゅうほ）の恩に報ずるに足るでありましょう。もし一心にこの経を持念し、また人にこの経を紹介して持念させたなら、すなわち、この人は父母の恩に報じたことになるのです。もし、一生のうちにあらゆる十悪・五逆・無限の重罪を犯してしまった者も皆、その罪は消滅して、無上道を得ることができるのです。」と。

この時、梵天、帝釈、諸天の人民、一切の衆会、この説法を聞いて菩提心を発し、五体を地に投じて涙雨の如く、進みて佛の足を頂礼し、退いて各々歡喜し、実践を誓い合った。

因縁所生（いんねんしよしょう）と云う言葉があります。すべては因縁によって生まれ、そして滅すると云うことです。私たちが普通に縁と呼ぶものが仏教の恩縁（おんねん）です。

自分に生命を与えてくれた父母の因縁「親子の因縁」の深さと有り難さは格別です。頼んで産んでもらったわけではない等と口にするものではありません。信仰の別も、賢愚の別もありません。人の道とも云うべきでしょう。

このお経＝父母恩重経の読み降し文は、書山書院 編集発行者 沢宗彦で、私（矢吹）が現代文様に表現したものです。

2. 戦国に生きた キリシタン大名

会員 井上秀男

1. キリスト教と備前の明石氏

戦国時代の天文12年(1543)ポルトガル人の乗った船が鹿児島県の大隅半島の南方 40kmの海上にある種子島に漂着し、この時に鉄砲が伝わる。俗に火縄銃で戦国の合戦で使用されるようになり、合戦の方法も変化する。

その後天文18年(1549)8月15日宣教師ザヴィエルが鹿児島に上陸してキリスト教を布教する。仏教文化の日本の地に異質の文化をもたらした。

そして戦国時代の織田信長、豊臣秀吉、徳川家康などとキリスト教との深い関係が生じてくるのである。キリスト教伝来の当時には三名とも幼少の頃であった。

時代の流れの中でそれぞれ天下人となってキリスト教を保護する時もあり、家臣の諸大名の中にキリシタン大名として、小西行長、高山右近、宇喜多秀家がいる。秀家の家老明石掃部頭全登（かもんのかみおしとう てるずみ）、他に家茂、守重、景盛と名乗る。

備前の明石氏について勢力範囲は備前東部赤磐、和気の吉井川周辺を基盤として、宇喜多氏より早くから播磨の赤松氏と関係を持っていた豪族とされ、浦上氏滅亡後は宇喜多氏に仕えた。

明石氏は松田氏が日蓮宗に帰依しているがキリシタン信者として早くから知られていた。明石氏が本拠地としていた吉井川周辺の中流域に位置している明石氏と関係のある城郭があり、その中で赤磐市万富にある保木城は連郭式山城で、浦上氏の家臣であった頃、明石源三郎景親、明石掃部頭全登の二代が居城していたとされる。

それと、玉野市大崎にある麦飯山城があつて明石源三郎景親が居城していて宇喜多直家に仕え天正4年(1576)麦飯山合戦で庄勝資と戦つて討死したと伝えられ麦飯山麓に墓石が数基あつたが今は見当たらない。

明石氏の居城と伝えられている城跡が赤磐郡瀬戸町坂根に物理(もとりい)城がある。この坂根という地名は昔、物理郷(保)に属していたらしく大内の対岸にある備前市の坂根を「いで坂根」と呼び、ここの坂根を「もとりい坂根」と呼んでいたと伝えられている。

坂根の地名は肩背(かたせ)や江尻へ越す坂道の裾であるので名付けられたという。物理(もとりい)という地名は和名抄などには物理保と見え、水取部(もひとりべ)が居住した所とされている。私の生まれた場所は赤磐郡是里大字物理であり、坂根の物理と何か関係があると思っている。中々読み難い地名である。

物理城は物理保の地続き坂根集落の山頂にあつたと伝えられていて、物理貞茂の居城であつたが、「吉備温故秘録」によると、石橋右衛門に亡ぼされとか、物理民部丞の居城で、浦上氏の為に亡ぼされたと伝えられ、その後、浦上宗景の家臣の明石右京、周東飛驒守が居城したと言われている。

総社市下原地区に明石氏の居城していた城跡があり、夕部山城、あるいは伊与部山城と呼ばれている。高粱川の流れる西岸に位置して小高い山が見える場所である。この城に居城していたのは明石兵部少輔で、天正年間に築かれたとつたえられ、この明石氏は玉野市の麦飯山城主の明石源三郎景親の一族か、三村元親の重臣の明石与次郎の一族でないかと、色々の説がある。

明石兵部少輔には子息がなくて、中島炊之助の四男彦三郎を養子にして明石与次郎と改称して城主を継いだともいわれている。下原地域に明石姓が何軒もあり、総社市山崎の六体地蔵の

写真を写しに行った時に、古い墓石が有って、その墓石に明石氏の苗字を刻んであつたのを記憶している。この夕部山城の子孫の墓石と思われる。

2. 明石氏とキリシタン大名

明石掃部頭全登は明石源三郎景親の嫡男であり、名前を家茂、景盛、守重とも名乗っている。父の源三郎と初め浦上宗景に仕えていたが、宇喜多直家が浦上氏を攻めるときに時に、宇喜多直家に属して浦上宗景を討つのに協力している。このような関係から宇喜多氏と明石氏は結ばれていた。

宇喜多直家は戦いよりも毒殺、謀略で敵を葬る手段を得意として、同盟関係を結んだ武将や家族を自分の利と思えば亡ぼすのが常の人物であつた。だがこの明石氏については例外であつた。その理由として考えられるのが、明石氏は銅山経営、技術集団としての備前地域での統率者であつた。

銅は中世には輸出品であり資金源であつたために明石氏を家臣として活用する考えがあつたと思われる。

明石氏の居城とした瀬戸町保木山城は瀬戸町鍛冶屋、熊山町小瀬木などの銅山杭口を守る役目もあり、吉永町の小坂谷は明石氏の寝小屋、倉庫群があつて上流からはこぼれた粗銅をこの場所に集積したといわれている。

戦国時代になって、火縄銃の普及も高まり、火薬等が必要になってくる。火薬の原料(硝石)を手に入れること鉄砲の玉の鉛も同様であつた。これらの原料を入手するには宣教師の承認、教会の手を経ないと入手できない実状があり、明石氏は早くから宣教師、キリスト教との関係を保持していて、硝石、鉛、鉍山、鉍石採掘の新しい技術を必要として「南蛮しぼり」の技術を取り入れたと考えられる。

明石氏は宇喜多直家の代から宇喜多秀家の代まで仕え、慶長20年5月大阪の陣に宇喜多秀家の軍勢の中に、白地に黒の花クリスの旗指物を挙げた明石掃部頭全登の姿がある。

宇喜多秀家に家老として仕えた人物である。宇

喜多秀家は直家の二男で、父が没した時幼少であった為に秀吉に養われ、養女前田利家の娘豪姫と結婚して秀吉の一字をもらって秀家と名乗った。秀吉からの信任もあって、五大老の一人となり豊臣秀吉に仕えた。

時代は流れ秀吉没後、関ヶ原の役で西軍として戦い敗れ死をまぬがれ八丈島へ配流され、40年間、82歳で没している。この間豪姫や前田家からの救援物資が送られている。

宇喜多秀家は慶長元年(1596)義兄明石掃部頭全登とパウロ右亮の導きで洗礼を受けている。豪姫もジュリア内藤によって慶長11年(1606)洗礼を受けマリアと霊名をもらって 61 歳で没するまで夫と子供二人を守った。

この様に大名の中にキリシタン信者が見受けられる。例えば小西行長や高山右近が居ます。小西行長は和泉堺の薬種商、小西隆佐の子で、通称弥九郎と呼ばれ備前国の宇喜多直家に仕えていて、後に秀吉に仕える。天正 13 年(1585)水軍の将となって摂津守従五位となる。この年、小豆島、塩飽の管理権を与えられている。

小西行長は天正 12 年(1584)29 才の時に受礼しアグスチノと称していて、妻(マダレイナ)は北政所の祐筆を勤めた人物です。天正 15 年(1587)6 月 19 日豊臣秀吉の禁教令と共に高山右近妻子とオルガンチノを庇護してかくまった。次の年、天正 16 年 6 月 28 日九州宇土 24 万石に栄転し、この時に高山右近の一行も宇土の地に移動する。

それから小西行長は文禄慶長の役にと出兵するが文治派の小西行長、武断派の加藤清正との朝鮮出兵の中で確執が生じ、この件から関ヶ原の合戦で石田三成、小西行長の文治派と徳川家康、福島正則等の武断派の対立となり、西軍が敗北する。

大阪冬・夏の陣を経て豊臣家は滅亡し、小西行長は京都五条河原で処刑された。

キリシタン大名として高山右近がいる。大和国、沢の城主高山図書飛騨守・ダリオと母マリアの間に天正 21 年(1552)に生れる。幼名は彦五郎と称し、長じて友祥(ともなが)

長房、南房、等伯と称したが、通称は右近と名乗っている。永禄 6 年(1563)12 才で洗礼を受けてジュスト(義人)と称している。天正元年(1573)21 才で高槻城主となり、摂津余野城主黒田氏の娘ユスタと結婚をする。豊臣秀吉の信頼を得て、明石 7 万石に転封した。天正 15 年(1587)7 月 24 日九州平定の後、秀吉は突如、キリシタン禁止令を発したので、色々考えた結果、自分の生きる道として武士ではなくキリシタンとして生きる決心をして、明石領地を放棄して、博多湾の小島に身を隠して、淡路から室津港を経て父の高山ダリオと小豆島に潜伏していたとされ、父の高山ダリオは備中方面に渡りその後は不明である。

関ヶ原合戦後、江戸幕府が開かれ、キリスト教の禁止令などによって、信徒に対する弾圧政策が強くなる。キリシタン信者の確認する宗門人別帳踏絵などの政策を取る。

そうした状況の寛永 14 年(1637)廃城になっていた原城に老幼婦女子合わせて 3 万 7 千人が天草四郎時貞を盟主に幕府軍と応戦したが力尽きて翌年 2 月 28 日全滅した。それから明治 6 年(1873)に信教の自由が認められた。この間信徒の人々は各地に隠れ住み、石造物、墓石の中に十字の文字を刻んだものがある。キリシタン遺蹟は島原、天草地方で特に多く、そして香川県の小豆島でキリシタン大名の小西行長の管理下でありキリシタン信者の集まった場所である。



香川県小豆島 三木家墓石(キリシタン墓石)

3. キリシタンと箕作家

小豆島に美作国 津山の洋学者箕作阮甫の祖先が住んでいた。その箕作が小豆島から美作国の地に来住した過程について触れてみる。

箕作家は近江国、現在の滋賀県の近江源氏の佐々木氏からの出自とされている。この近江の守護大名がキリシタン信者の蒲生氏郷である。この蒲生氏郷の客分として仕えていたのが箕作義弼(よしすけ)で、箕作家は佐々木氏から 22 代目高頼から定頼(箕作山城主)が初めて箕作氏を称する。定頼は弾正忠に任ぜられていた、定頼の子、義賢は左京太夫に任ぜられ、永禄 11 年(1568)信長が足利義昭を奉じて京に上った時、信長に反して敗れ、各地を転々とする。

その子の義治(義弼)は父の義賢と共に伊賀にのがれたが離ればなれになって、一時蒲生氏郷の客分になっていたが、蒲生氏が没落して江北に住したとされている。その後箕作泰秀は慶長 19 年(1614)大阪冬の陣に豊臣方について再起を図ったが、敗れて小豆島にのがれた。

その後箕作泰秀は小豆島の三木長貫(ながつら)の娘と結婚して2人の子供を授かる。長男泰連、二男義林で兄弟が20才前後の頃、島原の乱があり、その時に島原の地へ何かの目的があつて、兄弟で行ったのだが望みを果たすことなく帰郷する途中、美作国勝田の宿で母方の従弟三木長理に出会い色々話す結果、この地に留まった。

その後、兄弟は三木家の勧めによって美作の檜原村大谷(現在の美作市檜原上)に新田を開いて居住する。その後小豆島に住んでいた父の体調が悪く、二人で小豆島に父を迎えにいった、大谷に帰って来たといふとつたえられている。

この時に父の泰秀は小豆島から文珠菩薩と千手



観音の像を背負って来たとされ、千手観音像は全体が十字架洋式で、中央で手を合わせ、オメガ合掌していることから、父の箕作泰秀はキリシタン信者である。

美作市檜原 箕作家 千手観音像

キリシタン像

美作市檜原上に箕作家の姓が2戸あり新旧の箕作家の墓地がある。美作市檜原大谷に兄の箕作泰

連が居住して檜原の箕作家の祖となり、弟の義林は津山藩の森家2代目藩主の長継に召し出されて津山の林田(はいだ)新町(今の西新町)に移り住む。

箕作義林がどのような縁で召し出され藩内で活動したか詳しい点について定かでない。箕作義林には、義弁・貞弁と称する2人の男子がいて、長男の義弁は平太兵衛と称して森家3代長武に仕えている。この箕作平太兵衛の名前が赤穂浪士の神崎与五郎則休が元禄16年(1703)正月の日付で討ち入り後、預けられた水野忠之(ただゆき)に差し出した神崎与五郎自筆親類書の中に、従弟箕作平太兵衛と記されている。

弟の箕作貞弁は初め十兵衛と称して医術を津山藩医の岡喜庵に学び玄甫、丈庵(じょうあん)などと称して宝暦2年(1752)84才の長寿で没している。この箕作貞弁が箕作家で医業を開いた人で(玉置家文書)に「町宅医師本道(漢方内科医)西新町箕作玄甫」と記されている。この箕作家の子孫として津山の洋学者箕作阮甫が寛政11年に津山藩医の三男として津山城下の西新町で生まれる。成人して京都で漢方を学び、後、江戸に行き宇田川玄真に蘭学を学ぶ。

箕作阮甫の訳述書は数多く、医学、語学、西洋史学、軍事科学と広範囲にわたっている。そして我が国の近代化に貢献した箕作秋坪、箕作鱗祥(りんしょう)等 箕作家一族が明治以降の近代化に大きく寄与しています。

津山市の洋学資料館に色々な資料が展示されていて、箕作家の偉大さを知ることができます。平成25年6月1日に岡山歴史研究会の美作探訪の時にこの洋学資料館に見学に行ったので良く覚えております。

3. 明石庵の由来記

備前国和気郡田土村天神山城主浦上遠江守宗景公、天文2年4月9日播州室津の城を出て天神山城を築きて勢力を強める。家臣の宇喜多直家は

幼少の頃より、浦上家に仕えていたが、浦上を倒す計画を企て、直家の娘を宗景公の嫡男の与次郎宗辰殿に嫁がせ、直家は上道郡沼城主の中山備中守を殺して沼城主になる。

この節、婿君の宗辰殿を沼城に呼び、饗応に事よせ明石飛騨守一族明石桂庵(けいあん)という老医師が毒薬を調合した毒酒を用いて飲ませられた宗辰は身に異常を感じて即日天神山城に帰り、其の後容態が変わって没したとのことで、墓所は和気郡佐伯町下田土に五輪塔が建っている。

その後浦上宗景は明石氏、延原氏等の返忠のため天神山城は天正3年9月頃に宇喜多直家等によって落城する。

直家は備作を平定し、岡山城に居城し、天正9年没す。宇喜多秀家の時代になって豊臣家の五大老になって岡山城にいたが、慶長5年の関ヶ原合戦にて敗れ八丈島へ流罪となり宇喜多家は滅亡する。

その後、明石桂庵は各地を流浪の旅を続けていたが、縁を求めて備前国赤坂郡周匝郷草生村に来住し、明石庵を造りて、居住していた。明石桂庵は浦上宗景の嫡子与次郎を毒殺した悪業を悔いて読経三昧に余念なく、日々を送っていた。

その頃、成就坊という僧が木知ヶ原(現在の美作市美咲町木知ヶ原)にある長久山久成寺から頼り来て、明石庵を修理して一寺を建立する。この時に成就坊は以前いた木知ヶ原の長久山久成寺の、山号、寺号をそのまま持参して、新しく建てた寺の山号、寺号にした。

それから法燈の絶えることなく栄えていたが安永9年(1780)7月25日火災になり、本堂・古記一切を焼失する。

その後、和気郡佐伯町益原の本成寺より仏像・堂宇を貰い受けて、修復してから以来の月日が経っていて、寺の老朽化に伴って寺院の修築がされ現在に至っている。

この久成寺の開基は成就坊で、成就院は祐大徳と称している。塚は赤磐市草生の明石家墓地の耳

谷に在って、豊島石製の墓碑である。明石桂庵の没年月日と法名が草生の明石家の過去帳に見られる。寛永2年9月5日没。法名長遠院慶安日領居士と記されている。

関ヶ原合戦後、宇喜多家に仕えた明石氏も各地に分散していく。明石掃部頭全登も美作国吉野郡東栗倉庄後山村に隠れ住んだとか、色々な説がある。赤磐市草生(くそう)の明石家の過去帳には寛永頃から代々の先祖の没年月日が記されている。寛政12年(1800)に草生村久成寺住職日慶が過去帳を書き改めたと記録されている。

そして施主として赤坂郡草生村 明石文蔵と記されている。この明石家過去帳は明石文蔵の子孫で、美作市美咲町安井猿岩の明石氏宅に保管されている。この草生集落は津山

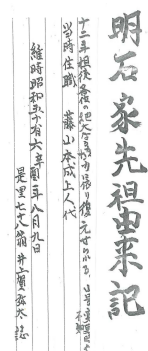
市からの吉井川と美作方面から吉野川との合流する場所で、周匝の茶臼山城の裾野で吉井川の川沿いに位置している。

明石氏、安光氏、檜原氏、下山氏、加藤氏等の姓がある。学校時代からの友達が数人いて良く遊びに行った地域です。

宇喜多家の家老として活躍した明石掃部頭全登からキリシタン大名の様々な生き方を通して、戦国時代をもう一度見直してみたい。岡山県の東部にキリシタン遺跡が多く、遺物も発見されている。現在の赤磐市下市、熊山の弥上地域からの土器もあり、これらのキリシタン資料を保管している備前キリシタン資料館にも足を運びたいと思っている。

参考文献

- キリシタンと小豆島 藤井豊著
- 浦上氏の研究 浦上 元 著
- 岡山蘭学の群像2
- 熊山町史調査報告書(四)
- 津山市の文化財
- 島原・天草のキリシタン遺跡
- 吉井町史 ○明石家先祖由来記
- 右参照 井上氏の父の蒐集資料



3. 桃太郎はなぜ岡山で

興隆したのか？ (前篇)

会員 藪下 義文

京都大学博士(地球環境学)

I. はじめに

1. 大きな、見えぬ力

民話には、語り継がれる面と読み継がれるふたつの面がある。草子や童話として語り継がれた里や地方の境を越えて、広く伝播していく。親から子へ、そして、友達同士で語り継がれ、読み継がれるなかに見えぬ大きな力が働く。その昔語りには、びっくりするような奇想天外の筋により、驚きと共感時間軸を越えて、大きな力が働いて民話が根付いていく。

2. 土地霊は政治をも支配する

広島県呉市の中心街で、古い建物を巡って自治体と住民・文化人の間で揉め事が起きている。海軍下士官兵集会所である。昨年、評判となったアニメ映画「この世界の片隅に」にも青山クラブとして登場人物している。築 80 年以上が取り壊し計画の根拠

だが、また、戦争は犯罪、更に敗戦国が犯罪者であるという風潮を背景に、軍事に携わった人たちの活動を想起する施設を忌避するムードがあると思われる。後述するが、これまでも桃太郎伝説も戦争と平和を巡る歴史観の揺れに影響を受けてきた。

しかし、建築史を専攻する中川理氏(京都工芸繊維大教授)は次のように語る。

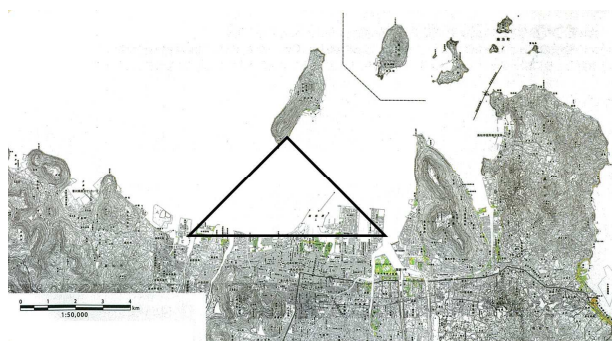
戦前期に建設されたモダニズム・デザインの希少な大規模建築として、建築史上も重要なものだが、それ以上に、軍人が街に集まっていた日常風景を作り出してきたかけがえのない施設として、何らかの保存・活用が求められるはずだ。

3. 交通路が生む土地霊

建築論で世界的に著名のノルウェーのノルベルグ・シュルツは、土地霊の持つ大きな力を次のように説明する。

土地霊が非常に強い力をもつことがしばしばあって、その結果、それが多くの民族の環境像の基本的特性を決定し、一つの民族が同一の場所を体験し、そこに帰属しているのだという民族的感情を作り上げる。

自分がある民族に属していると感じる瞬間を見事に表現している。これは民族という大きな概念だけでなく、桃太郎伝承の地・讃岐鬼無に住む一人の里人が、桃太郎を思い起こし、自分は「鬼無」の一員だと感じる場合にも通ずる。シュルツは、更に土



三角形が描かれる (図 1)

(出所) 高松市防災マップに筆者が加筆修正

地霊とともに大事な要素があって、特徴ある交通路によって土地霊が発揮されるとして、東西の交差路、コンスタンチノーブルを例に挙げている。

桃太郎伝説において、讃岐の鬼無と鬼ヶ島は、交通路がうまく使われている。屋島南方の津の村には舟の出入りがあり、その入江を底辺の一端として、桃太郎が生まれた本津川の河口をもう一つの一端として底辺を引き、高松沖の瀬戸内海に浮かぶ女木島をつなぐと、三角形が描かれる(図 1)。

1. 洋画家浅井忠が描く桃太郎

浅井忠の作品に「鬼ヶ島」がある(写真 1)。1905 年に、ロシア領の旅順が陥落した報を聞いて作品にしたものである。桃太郎を日本軍に、鬼をロシア軍に見立てている。世界の強大国ロシアに小国日本が挑み、勝利に歓喜して、桃太郎に日本を二重写しにした。今もなお、この絵を見るものに感動を与える。

近代日本画家の先駆者として知られるこの画家は、自ら志願して、日清戦争に従軍した。戦地に 3 ヶ月滞在し、福沢諭吉の時事新報にスケッチを送っている。対象は、日本兵、捕虜兵、野戦病院など…。浅井は画家としてのみだけでなく、教育者としても画壇に貢献し、安井曾太郎や梅原龍三郎など数多くの画家を育成した。正岡子規にも絵を教え、子規は病床にあってスケッチを楽しみとした。子規も日清戦争に記者として従軍している。浅井は、1856 年、江戸の佐倉藩屋敷で誕生、今年で死後 110 年である。

当稿では桃太郎伝説についてどう向き合うか、筆者の視点を紹介した。次稿ではこうした視点から、橋本仙太郎氏が讃岐の民話を研究して桃太郎伝説を見事に再編成したが、その後の興亡を、そして、吉備の地ではなぜ桃太郎伝説が興隆したのかを述べる。



写真 1. 浅井忠、鬼ヶ島
(出所) 黙語日本画集、芸草堂

参考文献

- 1) 橋本仙太郎: 鬼ヶ島征伐、1943 年(初版・1932 年)
- 2) 読売新聞、2017 年 6 月 29 日
- 3) C.ノルベルグ・シュルツ、加藤邦男訳: 実存・空間・建築、1990 年(初版・1973 年)

次号をお楽しみに！

筆者は、現在、故郷の香川県高松市に在住
環境問題や歴史系の執筆多数

4. 蒜山高天の原物語（1）

寄稿 橋本勝治(蒜山原在住)

目次

1. はじめに……………(17)－13P
2. 国のはじまり……………(17)－13P
3. イザナギとイザナミ……………(17)－13P
4. アマテラスとスサノオ……………(17)－13P
5. 蒜山高原の原の姉と弟……………以下次号
6. 天の岩戸……………
7. スサノオとヤマタノオロチ……………
8. 国ゆずり……………
9. 天孫降臨……………
10. 蒜山高天の原の終わり……………
11. 佐竹淳如先生のこと……………
12. おわり……………

2. はじめに

岡山県真庭市の蒜山地方には、古くから、日本最古の書物「古事記」に記されている高天原神話は、蒜山地方こそ舞台とのつよい伝説があります。

それは、蒜山の岩倉山に、大きなあなのある巨岩は、「天の岩戸」とみられ、付近に「祝詞」「大蛇」「鶏声」といった神話ゆかりの地名が数多くあることによるものです。

この伝説を重く受け止め、後世に語りつぎ、蒜山のロマンとして多くの人に楽しんでもらうため、偽史的物語としてまとめました。

3. 国のはじまり

この世のはじめには、な一んにもなかったのだ。上の方には、雲か霧のようなものが浮かび、下の方には、油のまじった泥のようなものが、クラゲのように漂っていた。

やがて、雲か霧のようなものがはれて、天と地がはじめて姿をあらわした。

空のはるか上にある蒜山高天原に、この世の中心をあらわす神、アメノミナカヌシが成り出でた。つ

づいて、いのちを生みだす神、タカミムスヒとカムムスヒも成りでた。

ずっと下の方のどろどろしたものの中から、緑の葦の芽のようにすくすくと萌えてできた。神は、ウマシアカビヒコジとよばれる青人草(あおひとくさ)、つまり、人間の初めのすがたであるという。つぎに、アメノトコタチという神、われら人間とおなじく土の中から萌え出たお方なのだ。この五柱の神々は、みな独り神で、いつの間にやらすがたを、隠してしまわれた。



この世のはじめ

上には、キリのようなもの 下には、油のまじった どろどろしたもの クラゲのようにただよっていた。



アメノミナカヌシ

タカミムスヒ

カムムスヒ

ウマシアカビヒコジ

アメノトコタチ

あおひとくさ
青人草 = 人間のはじめのすがた

4. イザナギとイザナミ

そのあとからも、神々は、つぎつぎに生れたが、どこへともなく、すがたを隠してしまわれた。

そして最後に、イザナギという男の神(兄)と、イザナミという女の神(妹)が生れた。

蒜山高天原の神々は、イザナギとイザナミに、「下の、やわらかく、ただよっているところを、しっかりとかためて国をつくりなさい」といった。そして、天(あめ)の沼矛(ぬぼこ)という長い槍をさずけた。

イザナギとイザナミは、蒜山高天原から、蒜山と伯耆の境の鬼面台のあたりの、空に浮かぶ天の浮橋に立って、沼矛を、ずっと下のやわらかに漂っているところにさしおろした。そして、コオロコオロと掻き回してから引き上げると、矛の先から雫がポタポタと垂れ、それがひとりでに固まって、重なり積み積もって島となった。おのずと固まってできた島だから、これをオノゴロ島とよぶ。

イザナギとイザナミは、その島に降りたって、この世の中心を示す天の御柱(みはしら)と八尋(やひろ)殿というつばな御殿(ごてん)をつくった。

それからイザナギが、イザナミはに、
「お前のからだは、どのようにできているのか。」
とたずねると、イザナミは、

「わが身は、成り成りて、成り合わないところがひとところあります。」と答えた。それを聞いたイザナギは、

「わが身は、成り成りて、成り余っているところがひとところある。そこで、わが身の成り余っているところを、お前の成り合わないところに刺しふさいで、国土(くにつち)を成そうと思う。生むこと、いかに。」と問うた。するとイザナミは、

「それは、とても楽しそうね」とお答えになった。それでイザナギは、

「それならば、われとお前と、この天の御柱(みはしら)を行きめぐり、逢ったところで、ミトノマグワヒをしよう。」とおっしゃった。

そして、さそいあって、柱のまわりを、イザナギは左から、イザナミは右側からめぐり、めぐり合ったところで、そのまま抱き合うと、秘(ひ)め処(ど)にまぐわいなされた。そして、イザナミが先に、

「ああ、なんてすてきな殿(との)がたよ。」とい
いそれに続けてイザナギが、

「ああ、なんとすばらしい娘(むすめ)ごだ。」と答えた。

そして生まれたのは、骨(ほね)のないヒルのような子だったので、葦(あし)で編(あ)んだ船に入れて苗代(なわしろ)川に流した。かげろうのようにはない子であった。

思いどおりに子が生まれないので、二神は話し合
って、蒜山高天原にのぼって、神々にわけをたず
ねた。

神々は、太占(ふとまた)という占いをして、「これ
は、イザナミの方から先に声をかけたのがよくな
いのだから、やり直すように。」と教えた。



オノゴロ島のイザナギとイザナミ

あめ ぬぼこ
〈天の沼矛を手にして コオロ コオロと〉



日本の国のはじまり

おおやしま たんじょう
大八島の誕生

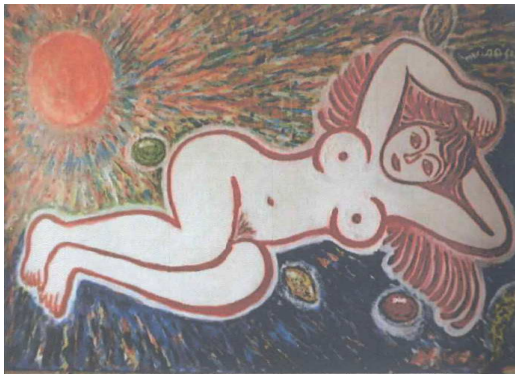
そこで二神は、今度はイザナギが先に、「なんと
うるわしい娘(むすめ)ごだ。」といい、イザナミが、
「なんと立派なお方でしょう。」と答えて、抱き合い、
ふたたび結婚の契(ちぎ)りを結んだ。

はじめに生んだのは、淡路島、つぎに四国の伊予
の島。それから、九州の筑紫の島、壱岐の島、対馬、
佐渡の島。そして、ついには、大倭豊秋津島(おお

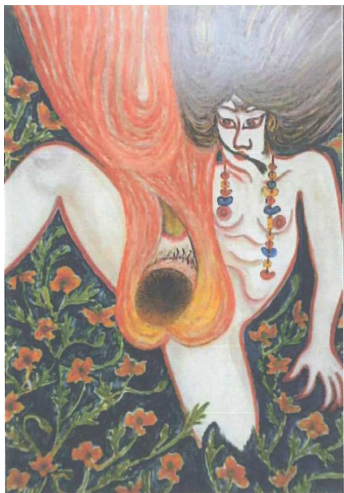
やまととよあきつしま)、つまり、本州(ほんしゅう)が生まれた。この八つの島を大八島(おおやしま)の国といって、これが、日本の国のはじまりとなった。

国をうみおえたイザナギとイザナミは、次々にいろいろな神を生んだ。

海の神、山の神、川の神、風の神、木の神。そして火の神カグツチを生んだとき、イザナミは、ホトに大やけどを負って、重い病気になり、とうとうこの世を去って、鳥取県西部の死んだ人が行く黄泉(よみ)の国に行ってしまった。



ごこく
五穀の神 農業の神 オオゲツヒメ
かいこ
頭から 蚕、目からイネ、鼻から 小豆
あずき
ホトから麦、耳から粟
尻から大豆を生み出す神
スサノオに切り殺された



火の神、カグツチを生むイザナミ
これが、もとで黄泉の国へ行った

イザナギは、いっしょに国をつくり、神々を生んだ
いとし妻を失って嘆(なげ)き悲しんだ。

残されたイザナギは、悲しみと怒りのあまり、イザナミを死に追いやった火の神カグツチをひと打ちにきりすててしまった。このとき飛び散ったカグツチの血から、後に「国譲(ゆず)り」で活躍(かつやく)するタケミカズチが生まれた。

イザナギは、それでもあきらめきれず、亡くなったイザナミに一目会いたくなって、とうとう地面の下の、暗い黄泉の国まで追いかけていった。

そして黄泉の国の御殿(ごてん)の前で、「いとし妻よ、かえってきてくれ。私とお前でつくった国は、まだつくりおえていない。さあ、いっしょにかえろう。」と呼びかけた。イザナミは、御殿の戸の向こうから答えた。「なんと悔(くや)しいことでしょう。なぜ、もっと早く来てはくださらなかったのです。わたしはもう、このけがれた国の食べ物食べてしまいました。生きた人の国へ帰ることはできません。それでも、あなたがここまできてくださったのは、とてもうれしいことです。わたしも帰りたいと思いますので、この国の神と話してまいりますので、その間、決してわたしを見ないでください。」と、言った。

いつまで待っても、イザナミはもどってこない。とうとうしびれを切らしたイザナギは、閉ざさせて重い戸を押し開けて、真っ暗な御殿の中へと入っていった。

イザナギは、左の髪(かみ)に刺(さ)した櫛(くし)の歯を一本折って火を灯(とも)すと、それを掲(か)げて、まわりを照らしながら歩いて行った。

すると、奥(おく)の方にイザナミが横たわっていたが、その死んだ体は、腐(くさ)ってくずれかけ、蛆(うじ)がわいて、ごろごろと蠢(うご)いていた。そして、頭や胸、腹、手、足の上には、八匹もの、汚(けが)らわしいイカズチ(雷)が生まれて、うずくまっていた。あまりの恐ろしさに、イザナギは、は慌(あわ)てて背を向けて逃げ出した。

イザナミは、歪(ゆだ)んだ顔を向け、「決して見てはいけないといったのに、あなたは、わたしに恥(はじ)を書かせましたね。」と叫ぶとすぐに、黄泉の国の恐ろしい女、ヨモツシコメやヨモツイクサたちに後を追わせた。

イザナギは、逃げに逃げて、大山の近くの烏ヶ山(からすせん)の麓(ふもと)まできたとき、クロミカズラで編んだ冠(かんんむり)をとって、後ろに投げた。すると、それは、エビカズラという山ぶどうの蔓(つた)になってぐんぐん伸び、たちまち沢山(たくさん)の山ぶどうの実をつけた。今、「蒜山ワイン」といわれているのは、この山ぶどうの実を原料としている。

追いかけてきたシコメたちが、この山ぶどうをムシヤムシヤ食べている間にイザナギは、逃げに逃げた。が、食べつくしたシコメたちは、またしても追いかけてくる。

そこでイザナギは、つぎに、右の髪(かみ)に刺していたタケで作られていた櫛(くし)の歯を、一本折っては後ろに投げ、また一本折っては後ろに投げた。すると、そこから筍(たけのこ)がはえてきて、シコメたちが、ガリガリかじっている間に、イザナギは、またも逃げに逃げた。

今、擬宝珠山(ぎぼうじゅざん)の麓(ふもと)に群生している熊笹(くまささ)の筍がこれである。蒜山では、ヘイトコといって民宿の料理に出され、観光客に喜ばれている。

おしまいには、イザナミが自ら、自分の体から生まれた八匹のイカズチに、千五百人もの黄泉の国の軍人(いくさびと)を従わせて、イザナギの後を追わせた。

イザナギは、後(うし)ろの手に刀を振り回しながらなおも逃げに逃げた。そして、ようやく三平山の黄泉の比良坂(ひらさか)にたどり着いた。イザナギは、そこに生えていた李(すもも)の木から実を三ヶ取るとイカズチどもに投げつけた。

すると、李の実が恐ろしかったのか、追っ手はみな逃げた。



烏ヶ山のふもとを逃げるイザナギ
山ぶどうや たけのこ

追いかけるヨモツシコメやヨモツイクサ



三平さんの^{よも}黄泉つ^{ひらさか}平良坂
スモモの実
チガエシの大岩

イザナギは、「李(すもも)の実よ、わたしを助けてくれたように、これからも地上の葦原(あしはら)の中つ国に住む青人草(あおひとくさ)が、苦しみ、悩むときは、どうか助けてやってくれ。」と、頼み、李の実にオオカムズミという立派な名前を授けた。これは、大いなる神の実という意味である。

イザナミの怒りは、おさまらず、遂には、自ら追いかけてきた。

そこでイザナギは千人がかりでしか動かせないような大岩を、黄泉つ平良坂の中ほどに引きすえて道を塞いだ。

イザナミは、悔(くや)しそうに叫んだ。「いとしいあなた、あなたがこれほど酷(ひど)い仕打ちをなさるなら、わたしわ、あなたの国の青人草を一日に千人ずつ絞め殺してしまいますからね。」と言っ

た。すると、イザナギは、「いとし妻よ、お前がそんなことをするなら、わたしは、一日に千五百人の産屋（うぶや）を建てて子どもを生ませるようにしよう。」と言り返した。

こうして、地上の国では、一日に必ず千人の人が死に、一に日に千五百人の人が生まれることになった。

この黄泉の比良坂の道を塞（ふさ）いだ大岩は、チガヘシノホカミと名付けられ、中和神社の交通安全の神として祭られている。

あの人工衛星はやぶさの奇跡（きせき）の生還（せいがん）は、この神の霊睽（れいけん）と、スタッフのお礼参拝の話は、あとあとまでの語り種（くさ）となっている。

イザナギは、深山口（みやまくち）に下り、ようやく、日野川の阿波岐（あわぎ）の原にお出ましになった。「われは、なんともしどく穢（けが）らしい国へ行ってしまった。だから、この身の禊（みそぎ）をしなければならぬ。」と言って、禊（みそぎ）祓（はら）いをした。その時に、投げ棄（す）てた杖（おび）や衣（ころも）から、数々の神々が生まれた。

イザナギは、また、「深い河の、上の方は流れが速く、下のあたりの瀬は流れが弱いと言って、はじめて中之あたりの瀬に潜（もぐ）って体を洗いすぎ清め・また、モズの底に沈んですすぐ時に成り出た神の名は、ソコツノヲという。また、水のなかほどあたりですすいだ時に成り出た神の名は、ナカツツチノヲという。また、水の面（おもて）のあたりですすいだ時に成り出た神の名は、ウツツツノヲといった。この三柱のワタツミは、いわゆる住吉三神（すみよしさんじん）と呼ばれる神で、難波（なにわ）の住吉神社の祭神で航海の神といわれている。

さて、禊（みそぎ）の果（は）てに、イザナギが、南の方に向かい、左の目を洗った時に神の名は、アマテラスオオミカミといい、天皇家の最高神で、太陽

神であった。つぎに、右の目を洗った時に、成り出た神は、ツクヨミノミコトといい月の神であった。つぎに、鼻を洗った時に、成り出たのが、荒々しい力を持つ、タケハヤスサノヲという神であった。

それにしても、イザナギは男（お）の神なのに、一人で子を生むことはできぬはずなのに。おのれ独りの力でつぎつぎに神を生み成していった。

イザナギはたいそう喜んで、すぐさま、首にかけていた玉の首飾（くびかざ）りをはずし、ゆらゆらと揺（ゆ）すってよい音をさせながら、太陽の神、アマテラスに授（さず）けた。そして「そなたは、空の上の
蒜山高天の原を治めよ。」と命じた。

つぎに、月の神ツクヨミには、「そなたは、闇（やみ）におおわれた夜をてらせ。」と命じ、荒々しい力を持つスサノオには、「そなたは、強い風の吹き荒（あ）れる倉吉（くらよし）の海を治（おさ）めよ。」と命じた。



ひのかわ
日野川でみそぎをするイザナギ

アマテラス

ツクヨミ

スサノオ

さんきし
三貴子の誕生

こうして、昼と夜と海とが、それぞれの神に委（ゆ）だねられた。そこで、それぞれの神は、父神（ちちかみ）の仰（おう）せのままに治めになる中で、ハヤスサノヲだけは、おのれが委ねられた国を治めようとはせず、あご髭（ひげ）が長く長く伸びて胸の前あたりまで垂（た）れるほどになっても、いつまでも哭

(な)きわめいておった。そのさまは、荒(あ)れくるう嵐(あらし)のようで、青々とした山は枯(か)れはて、河や海の逆巻(さかま)く波は、河(かわ)も海も干(ひ)あがるほどだった。



塩釜の眞名井でウケイをする アマテラスとスサノオ

すると、そのさわぎの中に、悪い神々が、ハエのようにわきだして、地上には、あらゆる禍(わざわい)が起こり、広がった。

困(こま)り果(は)てた、イザナギは泣きわめくスサノオに、「何故お前は、委(ゆだ)ねられた大海原(おおうみはら)を治めとうともせずに、亡きわめいているのか。」と、聞いた。するとスサノオは、「わたしは、母の国である根(ね)の堅州(かたす)の国へ行きたいと願って泣いているのです。」と、答えた。これを聞いたイザナギは、怒って、「そのようなことを言うなら、お前は、もうこの国に住むことはならん。」と言って、すぐさまスサノオを追い払ってしまった。

父と子の心のすれちがいが、大ごとになってしまった。

そのイザナギも、今は身を隠(かく)して近江(おうみ)の国の、多賀(たが)神社に祀(まつ)られている。

妻のイザナミは、出雲(いずも)と伯伎(ははき)の国との堺(さかい)の比婆(ひば)の山に葬(ほうむ)られている。

5章の「アマテラスとスサノオ」—蒜山高天の原の姉と弟—は ” きび考 ” 18号に続きを掲載します。

5. 上寺山餘慶寺略縁起と 豊原庄の考察

会員 丸谷憲二

1 はじめに

上寺山を良くする会より、『備前上寺山 歴史と文化財 豊原北島神社餘慶寺』が出版されたのは平成 18 年です。「上寺山の今昔 豊原北島神社と上寺山餘慶寺」(P22)を柴田一氏が寄稿されています。『邑久町史通史編』の出版は3年後の平成 21 年です。「第二節 豊原北島神社と南島神社」(P448)に、疑問点は解明されておりません。疑問点とは、① 長沼山頂の元宮(磐座)の場所と、② 大化の改新の 11 年前、634 年の根拠です。

一 上八幡宮と日待山本覚寺

豊原北島神社の歴史は南北朝(十四世紀)の頃を境に、餘慶寺の歴史は室町中期(十五世紀)に、文明の乱の頃を境にして、縁起・伝承の時代と文書・記録の時代に分かれる。まずそれぞれ「縁起・伝承」の時代にいてみよう。

一 上八幡宮

豊原北島神社の伝承によると、舒明天皇の六年(六三四)に豊前国大分県(宇佐八幡)を、邑久郡の豊原北島の山頂の大岩(鎮座石)に勧請したのが始まりである(祠官兼会氏筆記)。餘慶寺略縁起によると、舒明天皇の六年に宇佐八幡を勧請したのは邑久郡長沼村の山頂で、その後、報恩大師が日待山日輪寺を創建し、神託によって宮を長沼村から北島に移した。山王宮を八幡宮の護法神として祀ったのもこの時であるという。この「略縁起」の説では、八幡宮の豊原北島への勧請は、報恩大師による日待山日輪寺の創建以後つまり奈良後期から平安初期となる。しかし上寺山の豊原北島神社、餘慶寺の社殿・堂塔の配図などからみると、宇佐八幡の勧請を先とする神社の伝承が妥当と思われる。その後平安後期近衛天皇の永治元年(一一四一)勧

一 豊原北島神社

北島神社の由緒

豊原北島神社の豊原は豊原庄、北島は上寺山のことである。この地に豊前国(おさへ)の宇佐八幡宮が勧請された事情については二つの説がある。「餘慶寺略縁起」によると、豊原の宇佐八幡大菩薩が舒明天皇(じゅうめいてん)の六年(六三四)十二月十五日、邑久郡長沼村の山頂に來臨、その後報恩大師が上寺山を開き、神託があつて長沼からこの地に移したという。しかし北島神社の社記によると、舒明天皇の六年に豊前国よりこの地に來臨したという(『改訂邑久郡史下巻』237頁)。現在の境内の神社・寺院の配置からみると、参道正面に神社が祀られ、寺の本堂は参道の西手に東向きで建てられているから、神社の勧請の方が早かったと思われる。後者の説が妥当だと思われる。

2 長沼村山頂の元宮 大岩の下

いわくら 磐座と祭壇発見



『岡山市の地名』資料編に『岡山市の小字名』があります。長沼の小字名に「大岩の下」があります。平成29年5月19日に、岡山地方法務局岡山西出張場で『備前国邑久郡長沼村地図』を調査しましたが、字名は記録されていません。6月6日の再調査で、地番の地図に準ずる図面を入手しました。地番は1453番です。

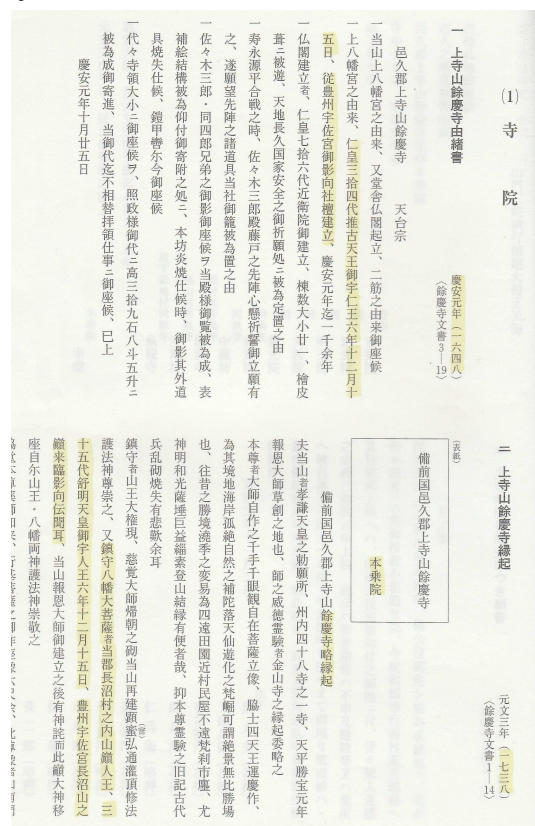
6月12日に、石原紀久男さん(長沼・中姓寺)に大岩の下を案内していただきました。場所は、豊原南島神社より徒歩15分程度の処です。岩神地区の人達は、大岩の存在は知っておられましたが、その大岩が古代信仰の磐座であったことを知りませんでした。

6月15日に、おくの細道アルプスの会の小林祥甫さんご一行を案内して「大岩の下」の高さ8mの巨岩の前の祭壇を発見しました。「いわくら」とは、神の座となる岩で神社建築の発生以前には、神を岩や樹に招き降ろして祭祀を行っていました。考古学では、磐座信仰は古墳時代に始まると説明されます。周辺を調査すれば祭祀に使用された祭器が発見されるはずです。しかし、私は最古の磐座とは、文字通り磐の上に座して太陽に祈る場所と考えます。私有地です。



3 舒明天皇六年(634年)と 宇佐神宮創建

元文三年(1738年)の『備前国邑久郡上寺山餘慶寺略縁起』に、元宮として舒明(じょめい)天皇六年(634年)に豊前(ぶぜん・大分県)の宇佐八幡大菩薩が長沼山頂に「来臨影向伝聞耳」とあります。「影向」(ようこう)とは、神仏が仮の姿をとって現れること、来臨とは、人がある場所へ来ることを敬っていう語です。『上寺山餘慶寺略縁起』では、豊州宇佐宮の来臨としていますが、634年の神託であり、神亀2年(725年)の宇佐神宮創建以前の伝承であり、634年の神託とは、宇佐八幡宮の勧請では無く、別の神様に由来する来臨影向記録と考えられます。



八幡総本宮 宇佐神宮

<http://www.usajinguu.com/lineage.html>

御祭神である八幡大神さまは応神天皇のご神霊で、571年(欽明天皇の時代)に初めて宇佐の地に ご示願になったといわれます。応神天皇は大陸の文化と産業を輸入し、新しい国づくりをされた方です。725年(神亀2年)、現在の地に御殿を造立し、八幡神をお祀りされました。これが宇佐神宮の創建です。

舒明天皇六年(634年)の初見史料は、慶安元年(1648年)の「上寺山餘慶寺由緒書」(P611)です。この記録が、1014年の間、どのような形で伝承されてきたのかが不明です。

『邑久町史史料編(上)』は、平成19年出版です。長沼山頂の元宮の初見は、1738年です。つまり、1738年迄は伝承が継続していたということです。

10月22日に、長沼ふれあい会館で豊原南島神社の氏子の皆さんに、634年の神託とは宇佐八幡宮の勧請ではなくて、豊原南島神社の豊原南島神に由来する来臨記録と報告しました。

豊原北島神社は、豊原南島神社より分離され移転したものと考えます。豊原角神社も分離され、長沼円定寺から岡山市東区浜へ移転しています。

4 現存する最古の八幡資料

南北朝時代の北朝扁額

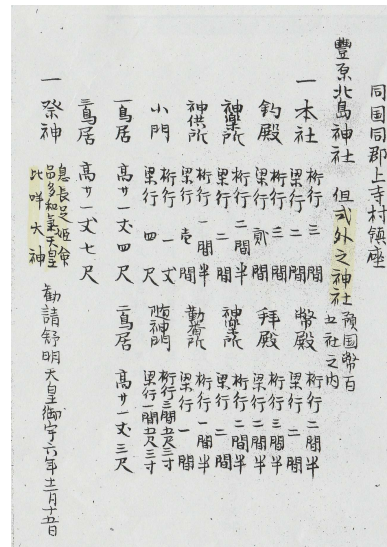
至徳3年(1386年)7月28日付の

上八幡大菩薩の扁額

4.1 北朝年号 至徳3年(1386年)

鎌倉末から南北朝時代には児島高德の同族である大富・和田・射越・今木・藤井氏などが南朝方として活躍しましたが、至徳(しとく)は、北朝年号です。南朝の元中9年(1392年)、後亀山天皇が退位して南北朝合一が成り、元号は北朝の「明德(めいとく)」に統一されました。

4.2 八幡宮の祭神名



至徳3年(1386年)に、祭神名が上八幡大菩薩と変更されたと考えます。康応2年(1390年)5月の扁額には正八幡宮とあります。池田家文書『神社明細帳』により祭神名を確認しましょう。祭神は、息長帯姫命・品多和気天皇・比咩大神の三神であり、宇佐神宮の祭神、八幡大神(応神天皇、諱は誉田別尊(ほむたわけのみこと))・比売大神・神功皇后(息長帯比売命(おきながたらしひめのみこと))と同一です。

舒明天皇六年(634年)の初見史料、慶安元年(1648)「上寺山餘慶寺由緒書」の筆者は、本坊本乗院住職と推定されます。寛文6年(1666年)の池田光政による寺院淘汰により、本坊・本乗院の住職を還俗して業合(なりあい)斎と改名し、上寺山八幡宮の神職を仕り候とあります。

命、保食神を加う。

明治三年豊原北島神社と改號、同六年郷社に列せられ、同四十年一月二十七日神饌幣帛料供進の神社に指定せらる。合祀により祭神に品陀和気天皇、息長帯姫命、比咩大神、須佐之男神、大産靈命、奥津彦命、大己貴

備前風土記に邑久郡豊原北島神社とあり、神名帳に豊原北島神とあり、応永明応の神階記には豊原北島大明神とあり。長沼郷豊原北地村上寺の山を古は北島といふ、此山の神なり。戦國の時浮屠氏名を八幡と替へたり。

(邑久郡史料)

4.3 戦国の時浮屠指名を八幡と変へたり

『改訂 邑久郡史下巻』が昭和 29 年に出版されました。第三節社記の三、今城山「郷社豊原北島神社」の P236 に、「備前風土記に邑久郡豊原北島神社とあり、神名帳に豊原北島神とあり、応永明応の神階記には豊原北島大明神とあり、長沼郷豊原庄北池村上寺の山は北島といふ、此山の神なり。戦国の時浮屠指名を八幡と替へたり。」(邑久郡史料)とあります。戦国時代に八幡に変更されたという記録です。

浮屠(ふと)とは、浮図・仏図とも書かれ、仏塔、僧侶を意味しています。浮屠を解説された人はいないようです。『備前風土記』の確認はとれません。

5 豊原庄の地名の由来



平安時代中期、931 年～ 938 年成立の辞書である『和名類聚抄(わみょうるいじゅしょう)』には、豊原庄は記録されていません。豊原庄は古代の郡・郷とは別の枠組みで成立しています。遅くとも 10 世紀までには成立していました。

豊原庄の地名の由来は、豊原北島神社説では、『鎮座石の上にわらをとき敷いて奉祀したことから、「ときわら」が荘名の「とよはら」となった』とあります。つまり、長沼の元宮伝承が途絶え新しく創作されています。豊原庄は巨大な天皇家の荘園でした。

5.1 豊原庄調査のための基礎資料

荘園名	豊原庄(トヨハラ)
初見年	長元 2 年(1029 年)藤原実資の日記『小右記』
本家・領家	後白河院領・禁裏料所・皇室領・東大寺領・日野家領

出典	堂本四郎氏所蔵文書・門葉記・備前遍明院文書・弘法寺文書・鳥居大路家文書・古文書集・加茂社文書・安仁社文書・東寺文書・東大寺文書・宝鑑寺文書・余慶寺文書・黄薇古簡集
範囲	邑久町豊原、牛窓町西部、吉井川左岸

参考文献『日本荘園データⅡ 博物館資料調査報告書-6』
1995 国立歴史民俗博物館 P217

5.2 豊原庄に関する最新の論文紹介

2005 年 2 月 19 日に「荘園の中に存在した庄と郷と保-王家領備前国豊原庄の基礎的研究」と題して、就実大学吉備地方文化研究所 中世史研究会で報告。

『日本中世の環境と村落』橋本道範(滋賀県立琵琶湖博物館専門学芸員)

2015 年 02 月 思文閣 P285～313

第六章 王家領備前国豊原庄の基礎的研究

第一節 豊原庄の成立とその性格—公家社会のなかの豊原庄—

第二節 重源による開発とその後の相論—南北条・長沼・神崎—

第三節 王家領豊原庄の内部構成—豊原六郷—
むすびにかえて—その後の豊原庄—

5.3 地名学による豊原庄の由来

豊原庄の地名の由来を地名学から考察すると、原は草の生えている平らで広い土地、平地を指す言葉です。問題は豊の由来です。

邑久町に尾張という地名があります。崇神(すじん)天皇妃が尾張大海媛(おわりのおおしまひめ)です。豊の由来は、崇神天皇の御子、豊鍬入姫命(とよすきいりひめのみこと)と豊城入彦命(とよきいりひこのみこと)と考えます。

参考 『大来(邑久)の古代史を彩る三人の女性』丸谷憲二 平成 29 年 7 月 15 日

平成 28 年 6 月 16 せとうちキラリ☆くらぶ 6 月例会講演
テーマ『百枝八幡宮より見える吉備国の古代史』より抜粋。

瀬戸内市邑久町に尾張という地名があり、崇神天皇妃が尾張大海媛(おわりのおおしあまひめ)です。豊原という地名があり、崇神(すじん)天皇の皇女が豊鍬入姫命(とよすきいりひめ)です。邑久の地名の由来は、大伯(漢音のタイハク)皇女ではなくて、大来皇女(おおくのおうじょ)です。この三人の女性について説明します。

5.3.1 豊鍬入姫命

豊鍬入姫命(とよすきいりひめのみこと)は、第10代崇神天皇の皇女で、天照大神の宮外奉斎の伝承で知られる巫女的な女性です。『日本書紀』崇神天皇6年条に、百姓の流離や背叛など国内情勢が不安になった際、天皇はその原因が天照大神(後の伊勢神宮祭神)・倭大国魂神(やまとのおおくにたまのかみ)(のちの大和神社祭神)の2神を居所に祀ったことにあると考えました。そこで天照大神は豊鍬入姫命につけて倭の笠縫邑(かさぬいのむら)に祀らせ、磯堅城(しかたき)の神籬(ひもろぎ)を立てたといわれます。

5.3.2 豊城入彦命

豊城入彦命(とよきいりひこのみこと)は、第10代崇神天皇皇子です。東国の治定(じじょう)にあたりました。

6 まとめ

橋本道範氏は、「王家とどのような由緒があり、どのような経緯で王家領となったのか、今後の検討課題としたい。」と結んでおります。これが現在の歴史学の限界だと考えます。

地名学では、豊原南島神社の祭神は、崇神天皇の御子、豊鍬入姫命、豊原北島神社の祭神は豊城入彦命となります。根拠は、男神の社は千木を外削ぎ(先端を地面に対して垂直に削る。)に、鰐木の数が奇数であり男神です。

634年とは、大来皇女誕生の661年の27年前です。何故、634年なのかは不明です。長沼が何

故、建暦2年(1212年)に永治御厨(みくりや)として伊勢神宮領に選定されたのかの考察から解読できました。

6.1 永沼御厨調査のための基礎資料

荘園名	永沼御厨(ナガヌ)
荘園コード	5101012 (重複コード初見年 建暦2年(1212年))
本家・領家	伊勢神宮領・二宮領・内宮領・外宮領
出典	神鳳鈔・神領目録

参考文献『日本荘園データII 博物館資料調査報告書-6』
1995 国立歴史民俗博物館 P218

6.2 鎌倉時代 建暦2年(1212年) 永治御厨 伊勢神宮領

長沼寺前の伊勢宮です。長沼が何故、伊勢神宮領に選ばれたかの研究報告はありません。長沼は、鎌倉時代の建暦2年(1212年)に、後鳥羽上皇の『院庁下文(いんのちょうくだしぶみ)』をもって伊勢の二所大神宮領に寄進されました。建暦2年(1212年)永治御厨、伊勢神宮領となると記録されています。御厨(みくりや)とは、神饌を調進する場所で、神饌を調進するための領地を意味しています。

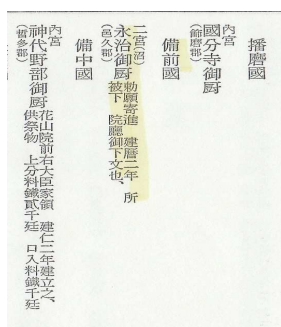


長沼は重要な場所であり二宮に注目しました。伊勢神宮の内宮(ないくう・皇大神宮)・外宮(げくう・豊受大神宮)を意味しています。内宮は天祖・天照大神を主神として祀り、外宮は天照大神の食事を司る御饌津神(みけつのかみ)を祀ります。1212年から1334年は、伊勢神宮領でした。

6.3 初代伊勢神宮齋宮大来皇女と豊鍬入姫命

豊鍬入姫命(とよすきいりひめ)は倭姫命(やまのひめのみこと)とともに伊勢神宮の齋宮の起源に求められています。『日本書紀』には、大来皇女(おおくのおうじょ・661~701)は天武天皇2年(673年)に

父の天武天皇によって斎王制度確立後の初代斎王(斎宮)として泊瀬斎宮(在所不明)に入斎院、翌3年(674年)に伊勢国に下向し、実質的な斎王制度は大来皇女に始まります。なぜ、最初の伊勢神宮斎宮が天武皇女の来皇女なのかに注目しました。倭姫命(やまとひめのみこと)とは、第11代垂仁天皇の第4皇女です。つまり、大来(邑久)は、伊勢神宮発祥所縁の場所なのです。



参考文献

- ①『角川日本地名大辞典 33 岡山県』1989年 角川書店
- ②『邑久町史 通史編』平成21年 瀬戸内市 P448～P451
- ③『池田家文書 神社明細帳』6 邑久郡
- ④『聖なる山とイワクラ・泉』薬師寺慎一 2006 吉備人出版 P8～P14
- ⑤『倭姫命世記注釈』和田嘉寿男 2000 2002 和泉書院
- ⑥『群書類従 第一号』昭和27年 群書類従刊行会 P300 P321
- ⑦『岡山県史 第19巻 編年史料』昭和63年 岡山県 P479
- ⑧『改定邑久郡史下巻』昭和29年 邑久郡史刊行会 P198～202・P228～P253
- ⑨『邑久町史 史料編上』平成19年 瀬戸内市 P611～P613
- ⑩『上寺山の今昔』柴田一『備前上寺山歴史と文化財』平成18年 P22～P23
- ⑪『日本荘園データII 博物館資料調査報告書-6』1995 国立歴史民俗博物館
- ⑫『宇佐家伝承 古伝が語る古代史』宇佐公康 昭和62年 木耳社
- ⑬『岡山県神社誌』昭和56年 岡山県神社庁 P172～201
- ⑭『邑久郡誌 第二編』昭和48年 名著出版 P525～P526
- ⑮『国史大辞典 2』昭和55年 吉川弘文館 P542

6. 考古・歴史散策

会員 山崎泰二

1) 私の仮説 草舟 = 藺草で！

と提案

専門家の皆さん 立証して

私が日本の先史時代を紐解く時に、日本人はどこから来たか？と常々考える。四方が海に囲まれ、温暖な海流黒潮＝日本海流と北方からの親潮によって豊富なプランクトンを餌にして小魚が発生し次々に大型魚が育ち、浅瀬ではコンブやワカメに代表される海藻が繁り、その海の海水を太陽によって蒸発した雲が列島の山々に冷やされて慈雨となり四季を彩り、緑の自然を醸し出していく。と、一気呵成に頭を巡る。

海は産物の採取に留まらず、海洋の交流を通じて異文化を吸収し、今日まで延々と途絶えることなく続いている。少し前まで河川が交流の道であったように、海は広く通商・交易の場であることは誰でも納得が出来る。

生まれたての赤ちゃんは、その育ちのレベルに応じて旺盛な好奇心で育っていくように当時の人々も異境地を求めて、海洋交流に果たした役割は大きい。その原点が海を渡る「舟」であり、大きな木を伐り出して丸木舟とした痕跡は各地で発掘されている。



私の故郷鳥取の桂見遺跡では1993(平成5)年に「国内最大級の縄文期丸木舟」(写真参照)

朝日新聞一面に大きく報じられ学術上定説となっている。この時代は、日本海側が列島の表玄

関で、手元の新聞切抜資料でも舞鶴・滋賀・福井・石川・淡路などで丸木舟が、北海道では舟形の土器が出土している。

これらの丸木舟は泥沼の湿地層に比較的硬い木質であったために遺物として残った。縄文時代は主に石斧であり、柔らかく軽い杉材を削り抜くには、炎で炙りながら削ったと専門家は論証している。

しかし、縄文時代以前に渡来した人達は竹の筏(いかだ)や草舟が考えられる。当時台湾は大陸と陸続きで琉球諸島は彼らの好奇心を煽った。そこでその思いを一にする科学者が思いを遂げるため、昨年 2016(平成 28)年 7 月国立科学博物館のチームは「草舟」で渡航を試みた。

台湾と沖縄の与那国島まで 110 ㌾。黒潮は毎秒 1.5m だから時速にすると 54 ㌾。これなら乗り切れると蒲＝ガマを編んで作った。

が、結果は失敗した。しかし 3 万年前の先人は一度や二度の失敗では諦めず、日本列島にたどり着き、今の我々がある。

そこで素人の私が、もし若くて元気が良ければ、岡山の名産だった畳表の「藁草＝イグサ」を「草舟」に仕立てて挑戦してみたいとの仮説を立てた。

イ草はイネ科と違い、茎の中は「スポンジ状」で空気を好み、水を弾(はじ)く性質があり、畳表に適している。表面は艶があり撥水性が良い。その性質は昔も今も変わらない。

イ草で作った草舟なら水に沈めても自力で浮上し、舟の中に溜まった水も弾き出し、空気を溜め込む。最近たまたま民放の娯楽番組を見ていたら、急流

を草舟で下り、時に転覆しても浮き上がっていた。この舟は藁草生産者の古老たちが編み上げた頑丈なもので、その画面が鮮明に脳裏に残り、私の仮説のヒントになっている。

古代人は黒潮(日本海流)に乗って菰(むしろ)を帆にし草舟でやってきた。旧モンゴロイドは日本のみならず、アメリカ大陸まで移動し現在の黄色人種の原点だ。これが藁草の草舟だとしたら私の仮説も世に残ることになる。

私は 2012 年に、魏志倭人伝の記録の中で卑弥呼が魏王に贈り物をした「絳青縑」のことを専門家が取り上げていないことに疑問を持ち、日本の山中で採れる天蚕だとする仮説を出した。奇しくも、その翌年に奈良女子大の中沢隆教授が纏向遺跡の遺物を分析し、国産の繭で赤色はベンガラで染色したものと証明して戴いた例もある。

絳青縑＝こうせいけん は赤と青の絹糸

File805「卑弥呼の天蚕繭を魏王に」を参照

どなたか私の仮説を証明戴くと、素人冥利に尽きる。冥途の土産にもう一つ付け加えたいと夢見ている。

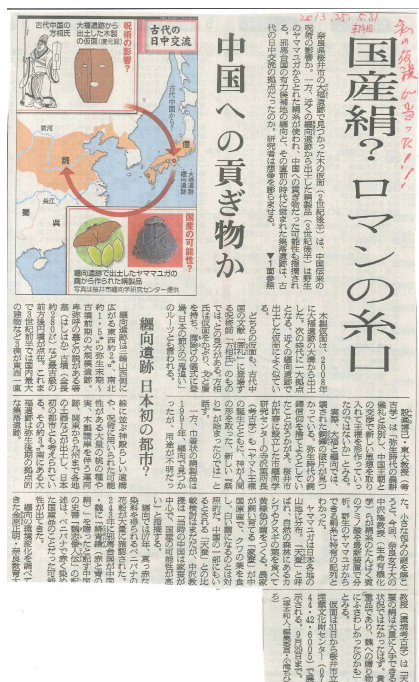
2)私の仮説を専門家が立証

『国産絹？ロマンの糸口』

(1) 纏向遺跡(3 世紀後半)で出土分析結果

表題の件は考古ファンのじゃれごとシリーズで発表していて、その NO⑤を 2012. 1. 21 に起稿し 2 月 29 日発行の「きび考」5 号に掲載し発表した。タイトルは「古代社会の産業革命と異文化の融和」と題し、主に水稻栽培技術とそれを受け入れた先住民(縄文人)の関係を論じている。





2013.25.5.31 朝日掲載記事

私はその中で、魏志倭人伝の絹は「山繭」と仮説を立てています。当時は学術的に国産の繭が定着していない状況で、倭人伝に記載されている『絳青縑（こうせいけん）＝赤と青の絹』の定説がなかったのですが私は次のように表現しています。

『魏志倭人伝にも絹のことが出ています。生糸（養蚕）は5世紀に伝わったとされていますから弥生時代は絹の生産はありません。しかし栽培種の粟に巻きつく山繭の存在を彼等が見落す訳がありません。中国地方の山塊を散策していますと、今でも山繭を見かけます。金糸は貴重でした卑弥呼が中国の魏王に献上したのは黄金に輝く金糸であったと想像しています。漆の採取も知っていたことでしょう。吉備の山間地には漆の木が多く自生しています。漆技術は中国より日本列島の方が1000年も早く縄文中期の遺物が出ています。

繊維質の多い麻や三桠（みつまた）・コウゾは今では和紙の材料ですが当時は、水にさらし柔らかくして布にしました。木綿（ゆう）と書きますが綿から採った糸で編んだ今日の木綿（もめん）ではありません。着物は当時機織が有りませんから当然女性らによる手織りでした。枝に縦糸をつなぎ睡でシャトルのように行き来して編み上げて行ったのです。今でも布の幅は女性の肩幅(3

～40cm)と決まっています。女性は貫頭衣として、男性は横幅布衣として着用しました。獣の皮も重要な衣類でした。』



今回上記朝日新聞の紹介で奈良女子大の中沢隆教授が、纏向遺跡から1991年に出土した遺物の分析で「天蚕＝てんさん」であることを証明され。それを染色して「絳＝赤いろ」が出せる技術もベニバナの花粉の確認で証明された。

この記事に接して素人の考古ファンが立てた仮説が、こんなに早く学者によって証明されたことが嬉しく、考古ファン冥利についた思いであった。

(2) 中国地方山地での山繭採取

私は戦後、母方の親戚が製糸工場を営み山繭から絹糸を作っていた。湯気が噓（む）せ返る工場の中で、年配の大勢のおばさん達が指サックをして絹糸を撚り出している光景の中で育った。一種いやな蛹（さなぎ）の匂いが鼻を衝（つ）いた。

中国地方の山麓では山繭（カイコの繭と同じ形で色が薄茶）がクヌギの枝にぶら下がっているのが目に付いた。それを集めて、叔父さんのところへ、持っていけば、子供の小遣いには余るほどであった。大人も専門に集めているようであって、製糸すれば茶色であり

金色に輝いた。一般のカイコの白い繭より高価なものようであった。私の幼少の頃の体験から古代に興味を持つようになって卑弥呼の魏への土産と重ねた。

(3) 倭人伝の魏への贈り物は天蚕と漆

桑の木の葉からカイコ(家蚕=かさん)は古代中国とギリシャを結ぶシルクロードで有名ですが、完全に家畜化された白い繭で今日まで綿々(めんめん)と繋がっています。

私の認識ではカイコや桑は半島から秦氏の技術集団が日本列島に持ち込んだと考えますが、繭を製糸にする技術が先行し桑と家蚕は後のことと思います。繭は山繭=天蚕でした。古代人も衣食住は、身近な山野の自然から採取し活用しました。麻や葛(くず)の自生している植物からの織物と、山繭や小動物の皮を加工する技術は持っていました。

特に漆の技術は日本の方が大陸より古いとの説が定着しています。日本の先住民=縄文人とその後の弥生人は海峡を挟んで大陸や半島との交流が活発で、金属加工(主に鉄や青銅器)稲作と関連技術を共有していました。海人族=倭族の活躍です。

卑弥呼はその中から、当時も今もそうですが貴重な天蚕の黄金の絹と中国地方特産の今の備中漆を持参し魏の皇帝に贈りました。魏志倭人伝では絳青縑(こうせいけん)として当時の中国の言葉で伝えているのです。

(4) 養蚕の思い出

私は戦後に山陰に育ったので、まだ養蚕が農家の一番の副業でした。母屋に続いて「養蚕場」があり、牛や馬は母屋の内庭で飼っていて家族同様に可愛がっていました。まさに家族の一員でした。蚕も家畜として飼われた最初で最後の昆虫です。小さい卵から孵った1

齢から10時間程度の眠りを重ね5齢で蛹(さなぎ)繭を作りその中で蛹化(ようか)し完成する。



自然のおはなし カイコ 山陽 25. 7. 24

小さい時の蚕は柔らかい桑の葉を与えていて、成長につれて食欲も多くなり竹の養蚕棚いっぱい桑の葉に音を立てながら食べていた。温度管理も大変らしく、室内は密閉され大人の真剣な様子が子供たちにも伝わってきた。食欲も旺盛になると、糞も多くその独特な臭いも忘れられない。

桑の葉もお仕舞いの頃には枝ごと採取してきて指先につけた刃物で素早く枝から葉を収穫していた。枝の片付け等が子供の役で外庭に山積みしておき、五右衛門釜のお湯の焚き火材として重宝していた。

その葉を採った残りの枝=桑にとって徒長枝は、確か皮を剥いで、和紙の材料に使ったと思うが当時は子供で詳しくは覚えていない。桑と同種の一年草が麻で、麻の木の皮から麻布を紡いだ。今に伝わる技術である。

我々が中学生になる頃は、あれだけ大切にしていた養蚕用の竹棚も、風呂の炊き材に消えていった。若者は「金の卵」として都会に駆り出された。

桑の木には実が付き、赤実が熟すると黒くなり、子供の格好のオヤツであった。学校の

帰り道、他家の桑畑で採取して食べると口元が黒くなっていて、一見して悪さがばれたが誰も咎める大人はいなかった。昭和 30 年代初めまでの集落の様子で、懐かしい。

実（じつ）は桑の実は、今住んでいる岡山市中区のふれあいセンターの中庭に植えてある。当地が桑野の地名に由来して、気の利いた職員が植栽したのだろう。グランドゴルフの仲間と遊戯中に、自然と手が出て桑の実を食していると、私より年配の仲間が珍しそうに見ている。干拓地で育った彼らには養蚕の経験が無く、桑畑は存在しない、よって桑の実も知らないで育ったのだ。

懐かしいことは他にもある。蛹（さなぎ）は私たちの当時は一般に鶏や鯉の餌だったが戦時中は人間の食材だったと親から聞いた。稲穂が実る頃は蝗（イナゴ）が大量にいて、自宅に持ち帰って煎って食べた。今でもイナゴの佃煮が美食家に愛されているが、当時は子供のオヤツであった。

余談だが地球の人口が増えると究極の食材の一つに昆虫があるとの学説を耳にした。蛹（さなぎ）が絹の材料でなく、食材の時代になるかもしれない。

（5）まとめ

今では皇居で田植えと養蚕が皇室（明治天皇と昭憲皇后から）の伝統行事として伝えられ、一般の養蚕は GM（遺伝子組み換え）カイコに替わりつつあることが、朝日新聞の平成 23 年 11 月 28 日の特集記事に掲載されていた。



朝日新聞の平成 23 年 11 月 28 日の特集記事

西暦 243 年に邪馬台国の卑弥呼が魏王の贈った絳青縑（こうせいけん）と称する絹が天蚕（山繭）であったとする私の仮説が今年の 5 月 31 日に学者によって証明された、意義は私にとって大きな出来事であった。話は横道にそれたが、それも一興として懐かしく思い出した。

てんさん

3) 卑弥呼の天蚕繭を魏王に

魏志倭人伝は総社の山で立証？

魏志倭人伝に卑弥呼が魏王に贈り物をしたと書かれている「絳青縑（こうせいけん＝赤と青の絹糸）」であったことは史実だが、それを証明するものが無く、敢えて素人の私が 2012 年に「我が中国地方の山繭＝天蚕から紡いだ絹製品だ」との小論を発表している。蚕の日本伝来は 2～3 世紀頃に伝来した説もあるが、そちらは絳青縑ではなく白色の養蚕である。

学術的には 2013 年（平成 25 年）に奈良女子大の中沢隆教授が纏向遺跡の出土品から国産（天

蚕)を証明された。私の方が一年前に仮説を発表してこのニュースを小躍りして喜んだ。

私は、別の小論で楯築墳丘墓は卑弥呼の祖母ではないかとも論じていて、弥生末期の吉備の文化



の高さを学びながら夢見ている。

さてその傍証が、2017(平成29)年10月9日の山陽新聞記事に総社の森山勝司(64)氏が「天蚕飼育に挑戦」と題した報告を

載せている。

山繭は薄緑の正に絳青縑の青であり、楯築墳丘墓が総社平野の一角で、中国山地の山繭を加工して魏王に贈り物にした可能性はますます高く評価できる。諸兄のご意見を伺いたい。

4) 小豆島と岡山の接点歴史が語る

もう随分昔のことで、長男が小学生で次男が4・5歳の頃に、家族で小豆島に遊んでいたら、手慣れた悪戯(いたづら)サルに小学生の息子が帽子を盗られ大騒ぎになった。高松に赴任していた昭和50年代のことである。

小豆島は神代の時代から今の岡山昔の吉備に属し「阿豆来枳辞摩=あずきしま」と日本書紀に現れ今に続いている。同じ吉備の児島には神武東征伝説の高島もある。共通の神話を持つ身近な島で、今我々が住む新岡山港からは定期航路が賑わっている。

あの時、家族に「昔この小豆島は岡山の津山藩松平家に属していた」と話していたら、たまたま傍にいた壮年の別の家族が「私は小豆島に生れ住んでいるが、そんな話は聞いたことが無い!」と怪訝(けげん)な問いがあった。そこで「それでは小豆島の電力はどこですか?」と、問うと当たり前の顔で「中電」と通称で答える。「四電では無いのですか?」の一言で岡山に繋がっていることが証明され、「有り難うございました」と丁寧なお礼の言葉が返ってきた。

小豆島は江戸の半ばから四国八十八カ寺巡りのミニ霊場が、特に山陰の鳥取・島根の農繁期後の慰労の定番で、子供の頃、親たちも巡礼の1・2泊の小旅行を楽しんでいた。瀬戸内海の小魚とこの島特産の醤油で作った「佃煮」は土産の定番で、親の酒の肴を摘み食いた頃が懐かしい。

今はオリーブの製品が新しい特産になり、我が愚妻も通販で色々楽しんでいる。醤油もそうめん(素麺)も400年の伝統産業で今に続いているが、元を紮せば異郷の地の技術を学んで特産に仕立てた。塩飽(しわく)水軍の血を繋ぎ伝統の海運で得た、新進の技術を自分たちのものにする気質は変わらない。

先の岡山歴史研究会の「蒜山探訪」を企画した工藤事業委員長にお礼を述べ、次の企画の一助になればと、小豆島の話をしたら、興味津々の様子。それならこの道の専門家である臼井洋輔顧問に相談したらとアドバイスをしておいた。歴史の繋がりが新しい夢を引き寄せる。

1. 会員読者の近況

1) 白河城で薪能の鑑賞

福島県白河市”きび考”愛読者

川瀬泰子

白河城山公園では、この夏の宵に「薪能」が催され、観劇を楽しみました。私は薪の明かりだけでするものと思いましたが、舞台が明るくイメージと違いました。

石橋のお獅子の舞の時にライデングとのコラボで、何回か放射線状に夜空を輝いたのは現代のお能と思いました。梅若玄祥さんのお弟子さんですので、新式を取り入れたのかと思いました。

私は昔、仕舞をお習いした事があり、亡くなった夫は、歌舞伎に関しては白河一詳しい位だったので、お能に親しみがありませんでしたが、薪能は、昔 明治神宮で明るいうちに観た記憶があるくらいでした。今までは白河では、歌舞伎やお能に対して理解ある人はあまりいませんでしたが、少しずつ理解する人が増えているようです。

松平定信公自筆の和歌



1707 年に宝永の地震や津波があり、また 1783 年には浅間山噴火や典明の飢饉があり、多くの餓死者をだし一部暴徒化して米蔵を襲撃したり、百姓一揆などもあり、また、松平定信が凶作に供えて穀物の備蓄を命じたとあります。また、島原の乱では、領民、女子どもまでことごとく殺し、討伐軍も武士の全人口の一割も死傷したとか、その後、その領地は荒れ果て年貢が納められなくなり武士も食べられなくなりました。

そのような様々の経験から領民を大事にしなければとの精神が生まれたとか。また新田開発として、米作を増やしたが、新田開発も限界になり同じ面積から多く収穫をあげる事を考え、そのための農民も学問が必要になったとの事です。また、跡取りのいない大名は取り潰しによる牢人が生じ、無頼の徒と化し、戦乱を心待ちにしていたので、大名家の廃絶を減らし、牢人の発生を抑制した。

武家諸法度の第一条の「文武弓馬の道、専ら相嗜(たしな)むべき事」とあるのを、五代将軍綱吉は「文武忠孝を励まし礼儀を正すべき事」を改めたとか？

色々な紆余屈折があつて平和になつて、江戸文化が花開いたとか。その時代、イギリス、フランス、オランダなどは航海術や大砲が発達したので、植民地を増やしたとか。あらためて、先祖の有難さを感じました。〈岡山出身の磯田道史著『徳川がつくった先進国日本』を拝読して〉

编者より

2

川瀬泰子女史は、先祖が岡山の美作国の出身で、“きび考”の愛読者です。80歳を超えて矍鑠した知的な夫人です。お便りの一端を紹介します。

2) 先祖の有難さ

川瀬泰子

戦乱の世を過ぎ、徳川が藩主の頂点に君臨したので、各藩の国盗り合戦がなくなった事(藩内の小競り合いはあったけれど)、そして江戸文化が開花した事です。

3) 田中康之・康子さんの近況

会員 田中康之・康子

8月も中旬となりました。ご家族様には、お変わりなくお過ごしのことと拝察申し上げます。当方も二人とも、歳相応に元気に過ごしています。関東地方は内陸的なので、朝夕は風の時間があります。この事は、瀬戸内海岸地方と同じようです。先日は懐かしいお便りと『”きび考”』をお送り戴き有り難く拝読させて戴きました。山崎さんと井上さんのご研究の成果を興味深く読ませていただきました。

”きび考”に投稿されている会員の皆様は、本当に古代史が好きで研究に没頭されている方々と感心しています。特に、後南朝と津山藩絶滅の裏史実の文面は、私達も一緒に探訪の旅をさせて戴いたので良く判ります。あの時訪れた各箇所が臉に浮かんできます。

久米南町の誕生寺に在る南朝七忠臣とその一族の中に、妻(康子)の両親二名の氏名が刻まれた銘板があったこと、赤磐の山中・是里の井上秀男様の実家、その横の井上一族が建設した「井上一族の出所・天神山城落城の顛末・各所流転・是里暮らし等」などの史実、妻の実母旧姓・井上小塩の末裔井上朝子さんとの面談「栗おこわ」のお土産の事…思い出されます。

何度読んでも懐かしさを感じ、嬉しく思い出しています。本当に一生の思い出の一つです。これからが、暑さの盛りになります。如何か、ご健康にご留意の上、お過ごしください。

H29年8月21日 田中康之・康子 拝

編者記

田中夫妻は、今年の夏にお子様たちのお住まいに近い関東に引っ越され、近況の手紙を戴いて居たので、紹介いたします。新しい土地にも明るい人柄ですから、解けこんでご活躍と拝察しています。

4) 近況をコラムで三題

会員 近藤孝正

① 二宮金次郎に学ぼう

「二宮金次郎(尊徳)」私達の世代では知らない者はない。「薪を背負って読書する少年像」で、高さ1メートルの像が今も多くの小学校に残っている。元、岡山市小学校校長された植田心壮さんの講演と著書「二宮金次郎は生きている」には感動した。

小田原市には尊徳記念館がある。裕福の農家に生まれたが、両親を早く亡くした。薪を拾い集め、城下に売り歩く、読んでいる本は儒教である。田んぼ道に捨ててあった苗を開墾した土地に植え、30歳には四町歩の田んぼをもつ大地主になった。身長180cm、90kg 巨漢である。小さいことからコツコツ精神で、お金を貯め、知恵者で人の為に尽くした道德の模範の人である。70歳死去。

私は家族と力合わせ、欲で開墾に頑張った。中々、大へんな仕事である。収穫する時の喜びは筆舌しがたい。「二宮金次郎の像巡りの旅をし、一歩でも人間性に近づきたいと思っている。

② 幸せなら手をたたこう

坂本九ちゃんが歌った「幸せなら手をたたこう」、日本人では、誰もが知っている。昭和39年、東京オリンピック頃到大流行した。ボディアクションがあり、最初、歌声喫茶で歌われた。偶然、坂本九がこの歌を聞き、感動して、「この曲で世の中を幸せにしたい、希望の光を届けたい」と歌いだした。この時は作者不詳だった。ヒットした頃、作者が名乗り出た。木村利人さん25歳、坂本九と劇的な対面した。現在82歳、今も教鞭をとっている。

作者は昭和34年頃、YMCAのボランティアとしてフィリピンに2か月滞在。現地は「ジャポン死ね」と言われ日本憎し。その時代、友達が出来、あるもので

バスケットボールのホールを作り、地元ラジオに取上げられる。

戦争で迷惑をかけた、友達になろうと訴えた。日本に帰り、子供達が歌っていた歌を基に、「幸せなら手をたたこう」を作った。今や、全世界で、主に子供の歌として歌い継がれている名曲である。悲しい思い出のなかでできた曲であった。

③権藤 WBC 投手コーチに驚く

WBC 投手コーチがゆっくりとピッチャーマウンドに向かう。どこか見覚えある人だ。ダンディーで足元も軽やかだ。誰だろう、やっと分った。中日ドラゴンズの元投手でコーチ・監督した権藤博78歳だ。

私の年代で、プロ野球好きでは知らない人は少ない。昭和36年、中日に23歳で入団、1年目からエースで活躍。130試合中、69試合に登板し35勝19敗、新人での最多勝日本プロ野球記録だ。過酷な登板で肩を痛め、内野手に、そして30歳の若さで現役引退した。

その後、73歳で12年ぶりに古巣の中日へ投手コーチとし現場復帰。選手の自主性を尊重しながら勝利に導く指導者として評価が高い。登板過多で肩を壊したので、ピッチャーの立場になって考える人。コーチとして直言居士で、上司にも間違いだと思ふ意見には徹底して異論を唱えたとか。私も69歳でボイラー現場に復帰したが、上司・後輩には率直に意見を述べている。40年経験したベテランのボイラー技士だ。

9. 郊外探索の例会

平成29年8月31日

金光図書館にて

講師・案内 金光英子図書館長

1) 重陽の節句に金光図書館で

会員 山崎泰二

天声人語と滴一滴(山陽)が珍しく同じテーマを取り上げた。それが本日の表題である。私は重陽の節句と重ねて初秋を、金光図書館長の講話を仲間と楽しむ。



金光図書館で金光英子館長の含蓄のあるお話を伺いその後、本殿に拝殿して参拝し、身も気持ちも清廉になった。

金光特製の饅頭が席

に準備されていた 先生のお話は単に宗教教団の枠から離れた、現代風に表現すれば「地域密着」の初心を貫き、先の大戦でのある種の圧力も凌いで今日がある。図書館創設が昭和18年戦争のど真ん中で、幼児教育の先見性は金光教の真髄であろう。

兄を師と仰ぎ、その兄館長の急逝で心的混乱の最中(さなか)、引き受けた役の重さを、淡々と語る姿に、後光がさしているかに私には見えた。教義の詳しくは分からないが、英子館長を拝していると、地域の隠れた偉人を共に育て、発見するそんな役割の大切さを館長の直伝の秘と承った。

同行の加上義博先輩の声掛けで帰路は4名が同乗戴き、時あたかも重陽の節句、お任せスタイルの車窓を楽しむ。気付くと金光英子先生のお話に出てきた玉島の江戸風情が眼下に見える。高梁川河口部の新しいブリッジは爽快だ。

水島は戦時中軍用機の生産で日本有数の拠点で、

末期には工場の防空壕まで完備させていた。戦後は民需の自動車作りに変わり、そこで人生を掛けた樋口俊介氏は、道々の景色が懐かしそう。

右にハンドルを切り、下津井方面に車は向かう。加上先輩の独壇場で異論はない。脱線気味だが、初秋の浜風と瀬戸の涼光を菊の節句に重ねると、菊の香りが身近く感じる。

菊は天皇家のご紋になる前から、大陸伝来の文化で、日本人の心の泉である。泉と言え、菊水が自然の湧水の湧き上がる姿に模した古人(いにしえびと)の思慮の深さに感動する。先に金光英子先生のお言葉とその残像が重なって、コンコンと湧き出る姿は太陽がとりなす自然の力だ。

海を見ていると、そこから生物の命が始まり、太陽の熱で真水に変わり、やがて菊水として稲穂を育てる。その太陽が、最近の10年で最大の爆発現象＝フレアで、目には見えないプラズマが最新鋭の電子機器を直撃か？と騒がれた。幸いにさほどの異常もなく46億年の太陽の恵を受け繋ぐ。朝日と山陽の滴一滴が同じテーマをとり上げた由縁でもあろうか。奇遇なことだ。

金光英子館長のお話しと、加上先輩の安全運転で、重陽の節句を噛み締め、土産の海産物が夕食の話題に花を添えてくれた。お二方と多くの仲間に御礼申し上げる。

2) ”きび考” 16号を拝読して

金光図書館探訪(8/31)で

一般参加 塩田宏之

〈8月31日には金光図書館で、先史古代研究会の皆様と有意義な一時をすごさせて頂きました。その折戴いた皆様の作品集”きび考”等の中で、森家のことに興味を抱きました。〉との書き出しで、お手紙を頂きました。以下概ねそのまま掲載させて頂きます。

〈「森家 18 万石の悲劇」山崎泰二記の稿です。4月に津山城に花見に行ったとき、歴代城主のことが書いてありました。お家断絶後、二代藩主長継の子長直が備中西江原藩主として森家を再興し、さらに赤穂に(宝永3年)移ったとありました。

私の勤めていた矢掛町に、石井本陣がありますが、その裏口に、裏門座敷があり「清音亭」と呼んでいたそうです。元禄17年に、西江原陣屋を、高瀬舟で積んで石井本陣へ移築されたと言われています。昭和47年に修理し現存しています。

もう一つは「三幡鉄道」について研究されているのですが、私の地区にも「井笠鉄道」と云うのがあり、昭和46年まで走っていました。北川駅が近くにあったので、子どもの頃学校へ行っていましたが、今では、小・中学生に井笠鉄道のことを話したり、資料を提供しています。

昔のこと、文化財や、鉄道などを子供たちに伝え、大事にしていてもらいたいものです。またお目にかかって、色々お話をしたいと思っています。云々〉

塩田さんは元小学校の校長で、地域の文化活動を、森山上志さん等と活動なさり、金光図書館を先史古代研究会が訪問した折に参加されました。金光英子図書館とも入魂な皆さんで、とても有意義な例会になりました。(編者記)

9. 連載＝四国八十八ヶ所

めぐり

「歩き路の旅」 15

会員 樋口俊介

涅槃の道場香川県(讃岐の国)その3

66番(雲辺寺寺)～88番(大窪寺)合計23ヵ寺
(香川県)

遍路ころがしの第66番札所雲辺寺を打てば、大師の誕生の地善通寺をはじめ、町の中の札所が続く。讃岐の平野にたたずむ霊場を巡れば、結願も近い。

当日に歩くお寺に関する由来とか伝説等の内容を分かる範囲で説明と、歩き遍路中の出来事等を含めて書き、必ず最後まで歩き通します。

第51回

平成24年11月12日(月) 五色台遍路ころがしの坂を上がる(国分寺～根香寺)

歩き(ウオーキング)遍路 札所2ヵ所 約13km

81番(綾松山) 白峯寺「しろみねじ」

所在地＝香川県坂出市青海町2635

電話＝0877-47-0305

本尊＝千手観音菩薩
開基＝弘法大師・智証大師
宗派＝真言宗御室派

○崇徳上皇の御陵・御廟所があり、上皇ゆかりの寺として知られる。弘法大師が宝珠を埋めて霊場として定め、智証大師が千手観音菩薩を刻み、本尊として安置した。地元では、「しらみねさん」の愛称で呼ばれている。

◎千手観音菩薩について

千手千眼観自在菩薩というのが正式な名前で、それぞれの手に眼を持つ。さまざまな持ち物を手にして世界の衆生を救助する。

82番(青峰山) 根香寺「ねごろじ」

所在地＝香川県高松市中山町1506

電話＝087-881-3329

本尊＝千手観音菩薩
開基＝弘法大師・智証大師
宗派＝天台系単立

○本尊の千手観音を刻んだ木の根が芳香を放っていたことから、この名がついたといわれている。本尊だけでなく、五大明玉木像も重要文化財に指定されている。室内には信者が寄進した3万3333体の観音像がまつられている。

◎千手観音菩薩について

千手千眼観自在菩薩というのが正式な名前で、それぞれの手に眼を持つ。さまざまな持ち物を手にして世界の衆生を救助する。

筆者紀行

やま幸駐車場まで、友達の車に便乗し山幸発7:05分(少し遅れる)に乗り倉敷を経由して、参加者30名とスタッフ等4名の合計34名で瀬戸中央道に上り高松西 IC で下りて、一般道を走り前回歩き終えた、広大な境内には、今は焼けてなくなった伽藍のどっしりとした礎石が残り、かつての栄華をしのばせる。80番(国分寺)に8:37分に到着する。



白峰寺近の石塔



白峰寺納経所

先達さんから当日の注意事項、説明等受け軽く体操をして、8:45分スタートする。

第80番を打ち終えたところで平地の旅はう

ってかわり第81番へ向かう山道のたびとなる。遍路ころがしと呼ばれる急勾配の道が2kmくらい続く、「白峯寺」は五色の名がついた五峰のひとつ、白峯山の中腹にある。

国分寺から、「まむしに注意」などの看板を見ながら山道を歩き進む。急勾配の81番への遍路道はミカン畑が広がり、白峯寺の参道脇にはシャクナゲがひっそりと咲いている。

白峯寺が近くなってきたところに「摩尼輪塔」があった。摩尼輪塔は「下乗石」とも呼ばれ、寺院などの聖域の入口に建てられるもの。白峯寺のこの山門は、かわら屋根が段々になっていて「七棟門」という。



81 番 (白峰寺)



82 番 (根香寺)

山門前の駐車場の入り口の所に、源頼朝が崇徳上皇の菩提のために建てたという、供養塔の石の十三重石の塔(重要文化財)がある。

約2時間20分山道を歩いて11:06分に、81番(白峯寺)に到着する。少し休憩して準備を済ませ、全員で心を込めてお参りをする。

11:43分バスで坂出市内に行き、昼食をすませ再度白峯寺の駐車場に帰り、昼からのスタート12:35分から歩き出す、途中で休憩を3回くらいして、山道を歩き屋島方面を眺めながらオレンジパークを過ぎ五色台ミカン園を右手に見て、約2時間歩いて14時35分に82番(根香寺)に到着する。



根香寺の山門



82 (根香寺)

木々に囲まれ埋もれるような根香寺の駐車場の一角に、恐ろしい形相の牛鬼像がこちらを見下ろす。およそ400年前、この地方に現れて人

畜を襲っては喰ったという怪物の像だ。物騒な伝説とはうらはらに、根香寺の境内では閑静で時間が止まったかのようなたたずまいの中を歩いて、気持ちが穏やかになり心が休まる。

朱塗りの大師堂は格式があり、仁王像は迫力のある表情が凄い、回廊に数万の観音小僧を祀る本堂も見応えある。

本尊の千手観音像は重要文化財で、33年に1回開帳される秘仏。今回は2036年に開帳されるとの事。そして五大明王堂には、五大尊木像が安置されているそうです。こちらも重要文化財ですと説明を受ける。

気持ち新たに素直な心で、みんな大きな声で読経しお参りをする。

準備を済ませて15時:10分に歩き出し、バスが駐車している所まで行き、バスに乗り込み15:23分に帰路岡山へ高松ICで下りて倉敷を経由してやま幸駐車場に17:35分に着き、我が家には19時:20分帰宅する。

今日も無事で帰れて有り難う！感謝です！！

なお、本日の歩数は26271歩でした。

第52回

平成24年12月 3日(月) 高松市街をめざす
(根香寺～高松)

歩き(ウォーキング)遍路 札所1ヵ所 約21km

所在地＝香川県高松市一宮607

電話＝087-885-2301

本尊＝十一面千手観音菩薩

開基＝鑑真和上

宗派＝真言宗御室派

○義淵僧正の創建とされており、当初は大宝院と称した法相宗の寺だったとか。その後、讃岐一の宮の田村神社の別当寺となり行基が堂宇を修築して寺号を一宮寺に改めた。さらにその後、弘法大師が聖観世音を刻み、本尊として安置。

筆者紀行

山幸前7:15分に乗り倉敷を経由して、参加者33名と先達、スタッフ等4名、総数37名で瀬戸中央道に上り、前回歩き終えた82番の(根香寺)に8:57分に着く、準備を済ませ先達さんの説明を聞き、9:12分歩き始める。

山を下って香西寺を右に見て香西局を通り過ぎ約1時間30分歩いた所へ、バスに来てもらって鬼無町に行き、お店にて昼食(10:55～11:40分)をする。

鬼無町は「世界一の松盆栽と植木の里」というキャッチフレーズの町なので、あちこちに盆栽農家があった。鬼無の知名のいわれは、その昔に鬼退治が行われて、平穏な村になったという桃太郎伝説に由来するもの。そのため、町には「桃太郎神社」があるそうです。



83 番 (一の宮寺)



一の宮の大師堂

再度バスに乗り元の位置に帰り11:時43分から歩き出す。JR 予讃線と県道33号線を横切り、岩田神社を通り過ぎ高松自動車道の下を歩き県道11号線と32号線を渡り一宮中、一宮小を左に見て、約1時間40分歩いて讃岐の一宮田村神社と隣接する、**83番(一宮寺)**に13時:25分到着する。

本堂の前に薬師如来がまつってある石堂があり、その下には地獄へ通じる穴があると言われている。そこは「地獄の釜」といわれ、ここに頭を突っ込むとゴォという、地獄の釜の煮えたぎる音が聞こえるそう。確かにゴォッ、ゴォッという風の音が聞えた。また、心がけの良くないものが祠に頭を入れると、扉が閉まって頭が抜けなくなるという伝えがある。

お参りを済ませて、本日の目的地である高松市内に向け14:07分に歩き始める琴平電鉄琴平線を横切り、166号線、164号線を歩き県道12号線、156号線を長く歩き、10号線に沿っ

て高松自動車道の下と国道11号線を渡り、本日の予定地の高松市内のファミリーマートの駐車場に2時間20分歩いて16時:26分に、到着する。

忘れ物がないか確認して、16:31分バスで帰路岡山へ瀬戸自動車走り倉敷を経由して、やま幸駐車場には18:45につき、我が家には19時:20分に帰宅する。

今日も無事で帰れて有り難う！皆さんに、家族に、自分の身体に感謝です！！

なお、本日の歩数は37240歩でした。

第 53 回

平成25年 1月 7日(月) 源平古戦場屋島から
五剣山へ(高松～八栗寺下)

歩き(ウォーキング)遍路 札所2ヵ所 約24km

84番(南面山) 屋島寺「やしまじ」

所在地＝香川県高松市屋島東町1808

電 話＝087－841－9418

本尊＝十一面千手観音菩薩 開基＝鑑真和上 宗派＝真言宗御室派

○鑑真和上がお堂を立てるのが、はじまりとされる。その後、弘法大師が寺を移し、霊場として定めた。宝物館には、源平合戦の遺物や宝物など寺宝を展示保存されている。弘法大師が宝珠を納めた池「瑠璃宝の池(血の池)」がある。

85番(五剣山) 八栗寺「やくりじ」

所在地＝香川県高松市牟礼町牟礼3416

電 話＝087－845－9603

本損＝性観世音菩薩 開基＝弘法大師 宗派＝真言宗大覚寺派

○弘法大師が入唐前、この地に堂宇を建てて聖観音像を本尊として安置したのが始まりといわれている。「八栗の聖天さん」として、地元の人々からの信仰が厚いお寺。本尊のこの聖観世音菩薩は等身大で、弘法大師作といわ

筆者紀行

朝は冷え込みが厳しく(0, 8度)で寒い日でしたが、家を6時05分に出発して、やま幸駐車場から、7時05分のバスに乗り倉敷を経由して、参加者、先達さん等を含め33名で高速に乗り瀬戸自動を走り高松中央 IC で下り、前回歩き終えた高松市内のファミリーマートの駐車場に8:57分着く

準備等を済ませ9:10分から歩きスタート

国道11号線を進み高松琴平電鉄志度線を渡り、県道14号線を歩き遍照院の前を通り、屋島御加持水と食わずの梨を通り過ぎ、約2時間歩いて、**84番(屋島寺)**に11:07分着く。

屋島は海に突き出た半島で、文字通り家の屋根の様な形をしている。北嶺と南嶺があり、札所があるのは南嶺である。



屋島御加持水



大三郎狸の夫婦

屋島と言えば源平合戦で有名。84番「屋島寺」は標高約290mの屋島の頂上にある。島というからには船で渡らなければと思いきや、違う様で橋があるので車でも歩いても大丈夫です。

屋島寺はお遍路さんと観光客でいつも賑わっているそうです。名勝地屋島に広大な敷地を持ちその境内では本堂の右横の赤い鳥居と大きな狸の石像が目立っている。(太三郎狸の夫婦像)

「なぜ狸？」と思ったら、四国狸の総大将と崇められる太三郎狸をまつている「養山大明神」のことだった。太三郎狸は屋島に異変があるとき、事前に住職に知らせたという。

源氏の武将が血刀を洗った池や真ん中で割れたような形の宝物館には源平合戦にまつわる遺物等が保存されているそうです。

全員揃って大きな声でお参りをする。

少し歩き11:35分から近くで昼食をする。(11時35分～12時25分)次のへと12時35分から歩き出し、屋島ドライブウェイを横断して「うどん本陣山田家」

を通り洲崎寺の前を過ぎ八栗山口を通り八栗ケーブル右に見て、約2時間歩いて(途中で2回トイレ休憩等を含む)**85番(八栗寺)**に14:35分に着く



(八栗寺) 後ろ峰 (右上) 85 番 (八栗寺)

八栗寺の後ろには4つの切り立った峰の五剣山がそびえている。昔はその名の様に5つの峰があったのだが、江戸時代に一つの峰が崩れて4つになったそうだ。本堂脇の石段を上った所に、「八栗山中将坊」と呼ばれる天狗を祀るお堂がある。お堂の脇に、天狗が履く1本歯の下駄が奉納されており、ほかにも普通の下駄も十数足供えられていた。本堂の左手前には「聖天さん」の名で親しまれている歓喜天が祀られている。「聖天堂」。そのお堂の前に、二股大根の絡み合った石像があった。素直な心で気持ちを込めてお参りをする。

再度15:20分から歩き始め、本日の予定地には16:25分に八栗寺下に到着する。トイレ休憩等を行い16:40分に帰路岡山へ瀬戸中央道を走り倉敷を経由してやま幸駐車場に18:45分に着き我が家には20時05分に帰宅する。本日も無事で、家族に有り難う感謝！

なお、本日の歩数は29476歩でした

第54回

平成25年2月4日(月)～2月5日(火) 満願成就へカウントダウン(八栗寺下～白鳥温泉)

歩き(ウォーキング)遍路 札所3カ所

一泊二日 約38km

86番(補陀落山) 志度寺「しどじ」

所在地＝香川県さぬき市志度1102

電話＝0878－94－0086

本損＝十一面観音菩薩
開基＝菌子尼・藤原不比等
宗派＝真言宗善通寺派

○推古天皇33年(625)の創建と伝えられる。志度湾のほとりに建っており、1万坪という広大な境内には、藩主松平頼重が造営した本堂、大わらじが奉納された仁王門、志度寺縁起など、多くの重要文化財がある。

87番(補陀落山)長尾寺「ながおじ」

所在地＝香川県さぬき市長尾西653
電 話＝0879-52-2041

本損＝性観世音菩薩
開基＝行基
宗派＝天台宗

○聖徳太子が開創として伝えられており、その後、行基みずからが柳の木で聖観世音菩薩を刻んで本尊として安置。長尾寺の山門は重要文化財。境内には菅原道真公を祀る天満目左天堂、薬師堂なども建っている。

88番(医王山)大窪寺「おおくぼじ」

所在地＝香川県さぬき市多和兼割96
電 話＝0879-56-2278

本尊＝薬師如来
開基＝行基
宗派＝真言宗

○弘法大師が唐の恵果阿闍梨から授かった錫杖を修めて、八十八ヵ所最後の札所である「結願寺」と定めたとされている。広い境内には本堂の左に大師堂、その後方に多宝塔、本堂と並び阿弥陀堂がある。

◎薬師如来について

人間の病苦を癒しこころの苦悩、厄を取り除くなど12の誓願をあらわす如来で、四国霊場にはいちばん多く祀られている。

○1日目は八栗寺下から前山ダムまでの18km

筆者紀行

やま幸発7:10分乗り、参加者35名(先達さん等を含む)で、瀬戸中央道を走り前回歩き終えた八栗寺下に9:10分に着き準備を済ませ9:20分から歩き始める。国道11号線を進み町家が並ぶ旧道に入り、医学や発明を通じてあらゆる分野で活躍した平賀源内の生まれた家の前を通り約40分位で**86番(志度寺)**に9:57分着く。

「志度寺」の境内はとても広く、高さ33mの朱塗りの五重塔が目を引く。四国全札所の中で最大級の敷地面積を誇る。本堂と大師堂が、納経所でつながっているのが珍しい。



86番(志度寺)



平賀源内の旧宅

本堂の本尊の十一面観音は重要文化財で年に一度「十六度市」の開催される7月16日のみが開帳される。なお、「海女の玉取り伝説」が伝えられている。五重塔近くに「海女の墓」もある。

お参りを済ませて、長尾寺まで1時間40分歩き12:10分に**87番(長尾寺)**に着く。

長尾寺は、山の上でなく町中にある。源義経の愛妾、静御前がこの長尾寺で、出家して尼になったことで有名。静御前の母が讃岐の出身で、源義経と吉野山で別れた静御前が母と共にこの寺へ来たのだという。静御前は尼になるため剃髪し、その髪が埋められている「静御前の剃髪塚」が、境内にはある。心を込めてお参りをする。

近くの長尾町で昼食をするため、12:40分にバスで行き食事を済ませ、長尾寺に帰り準備を済ませて13:45分に歩き出し、1時間20分で、本日の予定地である前山ダムには15:05分に到着する。ダムを見学し休憩する。

15:32分にバスでホテル(塩江温泉)に直行し宿泊する。食事のあと温泉に入り西3階の1306号室

に11名が集り、日常の出来事や社会全般的な話題を自由に活発な議論を交わし大変に有意義な時間を過ごせた。

なお、本日の歩数は26298歩でした。

○2日目は前山ダムから塩江温泉までの20km

筆者紀行

翌日ホテルを7:31分に出て、前日に歩き終えた前山ダムに7:56分に着き準備を済ませて8:06分から歩き始める。当初は女体山(展望の素晴らしいが女体山は頂上付近では両手両足で岩場をつかみながら登る標高770mあまりの難所越え)を越える予定でしたが、体調不良の方々が多く出て無理と先達さん決断されて、別ルートに変更した。

国道377等を3時間歩き11:10分に**88番(大窪寺)**に到着する



(88番)大窪寺＝結願寺



大阪岬(標高270m)

山門から境内へ向かう石段の登り口には「八十八ヶ所結願」の文字が刻まれた石柱があつた。これを見ると、改めて、八十八ヶ所を歩いたという実感が湧いてくる(約1200kmを完歩！)

たくさんのお遍路さんが感動したに違いない。

感謝の気持ちでお参りを済ませ、あと昼食をして記念写真等など、13:01分に歩き始め約2時間20分で本日の予定地である白鳥温泉に15:20分に到着する。

15:35分帰路岡山へ倉敷を経由して、我が家には19時20分帰宅する。

すべてに感謝、家族に、身体に有り難う！！

なお、本日の歩数は37722歩でした

2日間の合計は約38km歩数は64020歩でした。

第55回

平成25年3月4日(月)～3月5日(火) 一番霊

山寺へお礼参り(白鳥温泉～霊山寺)

歩き(ウォーキング)遍路 札所0カ所

一泊二日 約35km

1日目は白鳥温泉から御所温泉まで19km

筆者紀行

山幸発7時10分に乗り、倉敷を経由して参加者32名(先達さん等を含む)で瀬戸中央道を前回歩き終えた白鳥温泉に9:31分に着く。

9:38分から歩き始める、県道132号線通り様松(かめしまつ)遍路橋を渡り129号線を歩き11:50分興田寺に着きお参りをする。

12:20分バスで津田まで行き昼食をする。興田寺に戻り13:31分から、JR高德線に沿って歩き白鳥消防分署の前を通り引田局を過ぎ約3時間歩いて16:40分に東海寺に到着する。

護摩祈願に全員で参加させて頂く約1時間かけて行われ、凄炎が高く上り部屋全体が赤く染まり見事で迫力があつた。バスでホテル(御所温泉)へ17:45分に到着する。

なお、本日の歩数は34545歩でした

○2日目は御所温泉から霊山寺まで16km

翌日ホテルを8:30分に出て、前日歩き終えた引田に着き8:45分から歩き始める前日と同様に高德線沿いに歩き、気持を引き締めて大阪岬へと登り下りで難所でした。約3時間50分歩いて3番(金泉寺)に12:31分に着いてバスで昼食へ、再度13:50分から歩2番、1番(霊山寺)には15:30分に到着する。お礼参りを、感謝の心でお参りする。

15:45分帰路岡山へ瀬戸中央道を走り倉敷を経由して、我が家には19時40分に帰宅する。歩き遍路の方々、家族に、自分の身体感謝！

なお、本日の歩数は27453歩でした

2日間の合計約35km 歩数は61998歩でした。

なお、高野山詣り(結願報告参り)は平成25年3月9日に妻と2人で、お詣りして来ました。この歩き遍路は、15回に分けて連載が出来ました事は、山崎編集委員長の協力のお蔭です。

有り難う！感謝感激です。

約5年間で55回にて完歩した、人生の大きな糧になりました。生涯の記念の記録に残せます。筆者

編集後記

○矢吹さんからは「父母恩重經」という聴きなれないお経の読み下し文を、矢吹流に解説して戴きました。お陰で子どもを育てているお母さんにとって読み易く、試読した我社の事務員は「もっと早くこのお経に接していれば、……」と感想を述べていた。

○井上さんは戦国キリシタンを、身近な郷土の武士層を取り上げて戴きました。岡山は江戸の初期に神仏の統廃合などの政策が続いていて、明治期の神仏分離は今も残像が残っています。宗教家の多く発生した故郷岡山の捉えがたいテーマを、お父さんの薫陶を受け継いで、今回の力作になりました。

○「蒜山高天の原物語」は、蒜山在住の橋本勝治さんが元小学校の校長らしく、自作の絵を紙芝居にして語っておられます。その手書き書下ろし原稿を頂きました。神話の世界を少しエロチックに笑いとばせる表現で仕上がっています。しばらく連載しますのでお楽しみください。

○丸谷さんは地元の身近な古代史を、出前講座的に講演活動を続け、とても好評です。多忙を苦とせず、呼びがかかればどんどん出かけて、眼も口も輝いています。

○長らく原尾島の老人クラブのお世話をなさっていた田中夫妻は、息子さんたちのお住まいの東京に引っ越されました。奥さんの看護学的センスは地元の仲間からも信頼され、ご主人のパソコンの腕は老人仲間では貴重な存在でした。これからも近況をお寄せ下さい。

○福島川瀬泰子さんからは、歴史系の全国大会で、「自分の先祖は岡山の作州と聞いている」と話しかけられ、以後交流させて頂いています。

戦争中、学徒動員で仲間が爆弾で亡くなり、生き残りとしての凜たる姿勢は、流石白虎隊を生んだ会津若松の武士の出で、今は亡きご主人と余生を文化活動(歌舞伎など)に取り組み風流な面もあります。

○長く故郷(香川高松)を離れ環境系の学際派、歴史にも造詣が深い薮下氏は、桃太郎伝説が高松や岡山に共通するテーマとして、新作を寄稿いただきました。続編が楽しみです。

○郊外例会は、金光図書館に伺いました。金光教の特殊な図書館と思ひしや、地域に開かれた図書館は、蔵書の幅と収蔵図書の多さに感動されました。金光英子図書館長は、小柄で親しみやすく、懇切丁寧に「開かれた図書館」のお話を伺いました。改めてお礼申し上げ、益々壮健で活躍を期待しています。

○好評戴いて居た歩き遍路のシリーズも最終回になりました。小まめにメモを保管し、写真等を紐解いて、樋口流語りの程よい手引き書になっています。次号の新しい取り組みに気持ちは移っているようです。

○今回は多彩な内容になりました。新しい連載もこれから楽しみです。皆さんの投稿をお待ちしています。私事ですが一日一作のコラムも900篇を超えました。継続だけが取柄の拙文ですが皆様に支えられて、「初老」を「雑学」に変えて取り組んでいます。間もなく1000篇になります。

○年末年始の多忙期です、夜間の事故などに気を付け合いながら、皆様の健壯をお祈りしています。良い新年をお迎えください。

編者 山崎

“きび考” 第17号

2017（平成29）年12月10日発行

発 行 先史古代研究会 会長 山崎泰二

事務局 702-8002 岡山県岡山市中区桑野 504-1
山崎方

電話＝086-276-6654 FAX＝086-276-2241

✉＝senshi@bosaisystem.co.jp

編集委員 山崎泰二（会長兼編集委員長）

井上秀男 延原勝志 樋口俊介

濱手英之 丸谷憲二